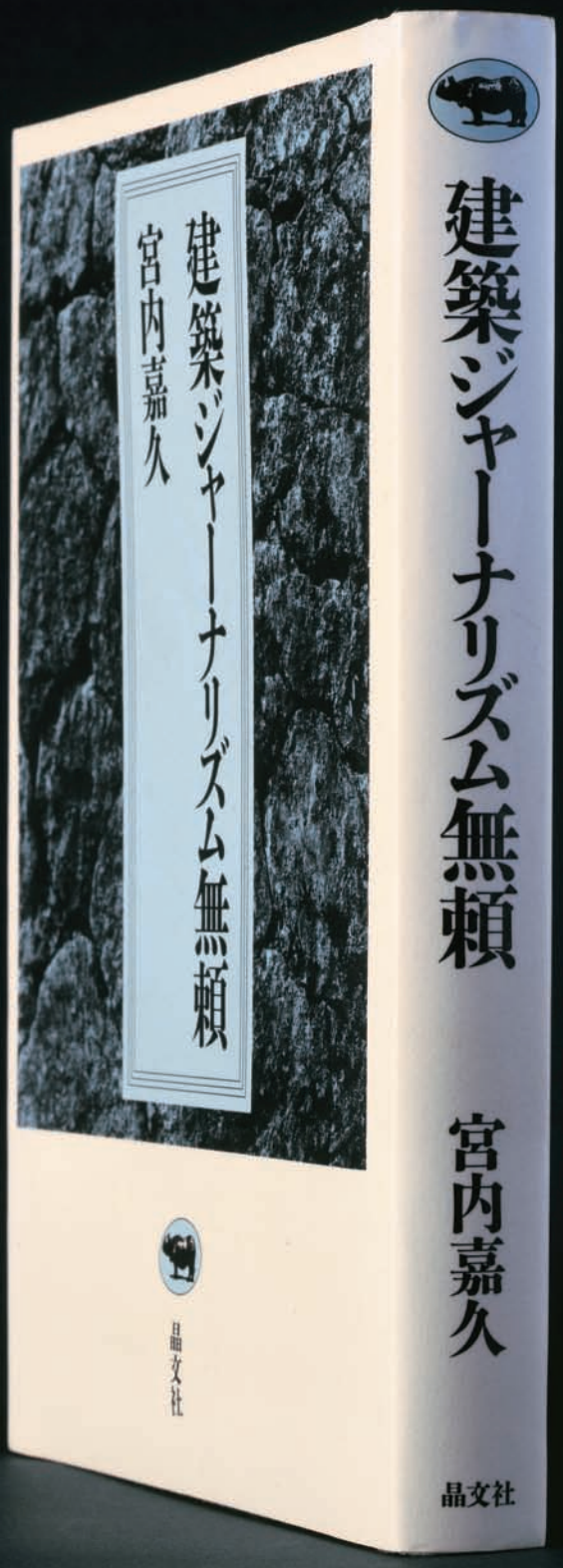
特集2

著書の解題—6

『建築ジャーナリズム無頼』

宮内嘉久



1945年5月25日の廃墟…。宮内嘉久の当時の記憶は、今なお鮮烈である。あの焼け野原の光景にこそ、自身の建築ジャーナリズム史の原風景、真の出発点があると語る。

そして1968～69年の大学闘争。大学生の問いに「斬られたと思った」と自戒する。更に衝撃を受けたのは、2001年の「9・11」。これを契機に、宮内は来し方を振り返り、原点に戻って「廃墟から」を復刊する決意をした。

一貫して在野の一編集者の道を歩んできた宮内は、書かずにはいられなかった理由を、静かに威厳をもって語った。そこには、戦後建築史の貴重な証言が描き出されている。

[特集2]序論

松隈 洋
HIROSHI MATSUKUMA

再読『建築ジャーナリズム無頼』

戦後の建築ジャーナリズムへ託されたもの

本書『建築ジャーナリズム無頼』[＊1] は、現在に至るまで、戦後60年近くにわたって建築ジャーナリズムの現場に身を置きながら、独自の活動を続けてきた編集者・宮内嘉久が、1994年の時点において自らの歩みを記した貴重なドキュメントである。内容としては、彼の最初の著書『少数派建築論』[＊2] のために書かれた1945年から1969年までの自身の年代記「巡行のノート」を下敷きに、その執筆と併行して発行した個人誌「廃墟から」[＊3] に掲載された文章などを、そのつど織り交ぜて加筆するという編集者らしい重層的に編集された構成となっている。

彼は、戦後直後の1948年、大学在学中の22歳で雑誌『生活と住居』[＊4] の編集にかかわったことを起点にして、翌年の1949年には、日本の建築運動史上において最大規模を誇った新日本建築家集団（NAU）[＊5] の機関誌『NAUM』の創刊に参加、その後、復刊されたばかりの『国際建築』[＊6] などを経て、川添登 [＊7] の誘いを受けて『新建築』編集部へ入る。そして、1957年のいわゆる「新建築問題」[＊8] による解雇をきっかけに32歳で自立の道を選び、以降、一貫して在野の一編集者としての道を歩んできた。こうして簡単に記したが、本書からは、組織や権威に守られることなく一人社会と向き合ってきたその道のりが、いかに紆余曲折に満ちた苦難の連続であったのかが伝わってくる。そこには、戦後日本の一断面が刻まれている感触も強い。そうした中で、宮内は何を求めていたのだろうか。

それは、戦争によってその決定的な欠落が明らかとなった、時代の流れに抵抗できる自由な議論の場を、建築の世界において実現することだったに違いない。本書の中で彼は、出発点にあった思いについて次のように記している。

「ぼくの内部で、建築の領域に、ジャーナリズムを通して批評精神を育てなくては、という青年客気の思い込みが強くなっていった。かつて見た古い建築雑誌の印象では、日本の建築界に、建築アカデミー――と称するに足る実質をもちえているとは思われなかったが――は仮にあるとしても、それに拮抗するだけの力をもつ、ジャーナリズム固有の批評精神は、きわめて稀薄と言わざるをえなかった。『建築ジャーナリズム』の確立、それこそが己れの目指すべき道ではないか、という選択が、自ずとぼくの胸中で固まっていったのである」。

そして、ここで彼のいう“ジャーナリズム”とは、「『日々の』事柄に関わりながら、しかも批評の眼を研ぎすますことによって、アカデミーとは別の、真実追究の道を拓くべきはずのものだ、という信条」として設定されていた。また同時に、宮内にとって、“戦後建築の真の出発点”とは、「都市の焼け跡、焦土の空間」にこそあったのだという。

恐らく、彼の目には、悲惨な戦争によって生まれた、どこまでも広がる廃墟としての焦土が、にもかかわらず、誰のものでもない自由な大地として映ったのだろう。だからこそ、その風景の共有感を根拠に、今度こそ、人々の日々の営みにつながる実質を持った建築と都市を育む言葉を紡ぎ出していくこと、そこに戦後の意味を切り開く自分の生きる場所がある、と確信したのではないだろうか。

印象的なのは、本書の冒頭に記されている「大きな余白」という言葉だ。戦時下の1944年10月に大学に入学した宮内は、図らずも、戦争によってすべての建築雑誌が休刊に追い込まれるという空白期に遭遇する。そして、この「大きな余白」というゼロ地点を境に、何の躊躇もなく、「くるりと変る」人々の姿を目撃することになる。これもまた、彼の立ち位置を形づくったかけがえのない経験だったのだと思う。こうして、「焦土の空間」と「大きな余白」という2つの視点を持ったからこそ、宮内の記す文章は、狭い世界にとどまることなく、水平に広がる自由な領野を獲得できたのであり、瀧口修造 [＊9]、針生一郎 [＊10] といった異分野の人々との横断的な交友も生まれたのだろう。その意味で、ページを進む中で読み取れるように、彼の出会っていった人々や出来事へのまなざしは少しもぶれていない。ここには他では知ることのできない建築の戦後史の貴重な証言が描き出されている。

さて、本書が出版されてから13年が過ぎ、戦後も62年を数えた。現在、建築や都市、そして宮内がその確立を志した「建築ジャーナリズム」はどうなったのだろうか。誰のものでもなかった「焦土の空間」は人々のものとなり得ただろうか。残念ながら、2005年に発覚した耐震強度偽装問題や、2007年のエレベーター事故によって建築への信頼が大きく揺らぎ、2002年に制定された「都市再生特別措置法」の下、超高層ビルとマンションの林立によって大都市の姿は激変した。一方、地方都市の壊滅的な衰退が進行するなど、予想をはるかに超える現実が壁のように立ちふさがり、生活環境への不安はむしろ広がっている。にもかかわらず、そうした事態を議論する開かれた場はかすかにしか見えない。

唐突な対比かもしれないが、ここで遠く北欧フィンランドのことを紹介しておきたい。1998年、フィンランドの総理大臣は、「偉大な建築家アルヴァー・アールトの生誕100年を祝うその年に承認されたことを喜ぶ」とのメッセージを添えて、「建築憲章：THE FINNISH ARCHITECTURAL POLICY」を発表する。そこでは、建築の担うべき役割と公的機関が目指すべき方向性が定義されており、「良い環境はすべての人々が持つ基本的な権利である」と明言されている。そして、建築遺産の重要性、公共建築が手本を示すことの大切さ、地方建築家の役割や基礎的な建築教育の必要性、公開コンペの意義などが淡々と解説されていく。ここには、「美しい国」という標語が流される日本とは違う、まっとうな公共性を確立しようとする努力がある。この落差をどう考えたらよいのだろう。

けれども、そうした中で、手がかりと勇気を与えてくれるのは、本書の後半に繰り返し差し挟まれている、1969年、自らの根拠地として設立したはずの「建築ジャーナリズム研究所」が挫折して解体を余儀なくされた後、再び一人に戻った宮内が、1970年から始めた、B5版ザラ紙4ページ、タイプ印刷100部の個人誌、「廃墟から」をさまざまな人々へと送り届ける、という仕事である。そこには、特定の少数の読者を想定したからこそ生まれた率直で切実な文体がつづられている。いつの時代においても、そうした批評性を持った言葉を紡ぐことを忘れなければ、それは確実に人へと届き、物事を動かす。

一方で、時代も動いている。本書に書かれている論点の中で、建築界における戦前戦後の断絶や、“くるりと変った”丹下健三や岸田日出刀 [＊11] の変節は、実は底流では連続しており、時流への迎合や転向だといわれてきた戦時下の前川國男の「在盤谷日本文化会館」[＊12] や、丹下の「大東亜建設記念営造計画」[＊13] などのコンペ案についても、むしろ戦後に開花する彼らの建築思想の核心部分を形成した重要なプロジェクトだったのだと思う。しかし、それらのより緻密な解明は、宮内から後に続く世代へと投げられた大きな課題なのである。私自身もまた、その役割の一端を担っていきたい。それは、なぜならば、今から30年前の1977年の夏、何も知らない19歳の学生だった私が前川國男の建築と思想に出会う大きなきっかけになったのが、当時、単行本にまとめられたばかりの宮内の著書、『廃墟から―反建築論』[＊14] だったからに他ならない。✽

『建築ジャーナリズム無頼』宮内嘉久著（晶文社　1994）

『建築ジャーナリズム無頼』（中公文庫）（中央公論新社　2007）

[＊1]『建築ジャーナリズム無頼』宮内嘉久著（晶文社　1994、中央公論新社　2007）
[＊2]「少数派建築論 ―編集者の証言」▸▸▸P.25
[＊3]「廃墟から」▸▸▸P.25
[＊4]『生活と住居』（誠文堂新光社）
[＊5] 新日本建築家集団（NAU）▸▸▸P.29
[＊6]『国際建築』▸▸▸P.27
[＊7] 川添 登（1926～）（『INAX REPORT』No.171、p.23参照）
[＊8] 新建築問題（『INAX REPORT』No.167、p.22参照）

[＊9] 瀧口修造（1903～79）（『INAX REPORT』No.170、p.19参照）
[＊10] 針生一郎（1925～）
美術・文芸評論家／戦前は「日本浪漫派」の保田與重郎に影響を受け、戦後は転向し共産党に入党、戦後美術批判を展開する。1960年の安保闘争で共産党指導部を批判し除名。その後“行動する評論家”として、美術・文学・社会の変革に向けた活動によって、言論界に強い影響を及ぼしている。著書に『言葉と言葉ならざるもの 針生一郎評論集』（三一書房　1982）他多数

[＊11] 岸田日出刀（1899～1966）▸▸▸P.21
[＊12] 在盤谷（バンコック）日本文化会館コンペ（1943）
大東亜記念営造計画コンペに次いで開催され話題を集めたコンペ。審査員は伊東忠太、内田祥三など当時の建築界の重鎮。1等当選の丹下健三は、寝殿造りのブロックプランを巧みに模した提案。先輩ながら2等に終わった前川國男の提案も、ル・コルビュジエ譲りのブロックプランながら、伝統的な屋根を架けたものであったことから、2人のモダニズムからの“転向”がささやかれた。両者の提案に対し、近代主義の立場から擁護することを目的に浜口隆一は「日本国民建築様式の問題 建築学の立場から」（『新建築』1944.10）をまとめた（大川）
[＊13] 大東亜建設記念営造計画設計競技▸▸▸P.29
[＊14]『廃墟から―反建築論』▸▸▸P.25

まつくま・ひろし――京都工芸繊維大学大学院 准教授／1957年生まれ。1980年、京都大学工学部建学科卒業、前川國男建築設計事務所入所。2000年より現職。
主な著書：『建築巡礼35 ルイス・カーン―構築への意志』（丸善　1997）、『再読／日本のモダンアーキテクチャー』（共著、彰国社　1997）、『日本建築様式史』（共著、美術出版社　1999）、『近代建築を記憶する』（建築資料研究社 2005）、『建築家 前川國男の仕事』（共編著、美術出版社　2006）、『前川國男 現代との対話』（編著、六耀社 2006）など。

特集2

著書の解題—6

[対談]時代を画した書籍—6

『建築ジャーナリズム無頼』

自らの立ち位置を問え

ゲスト　**宮内嘉久**　*YOSHIHISA MIYAUCHI*　（編集者）

聞き手　**内藤 廣**　*HIROSHI NAITO*　（建築家）

内藤廣氏

ジャーナリズムの自覚

内藤　建築界の言説はいっぱいありますので、今日はどこから伺おうかと考えながら来ました。聞きたいことがたくさんあります。

宮内　あなたのような厳しい方に問い詰められると、まな板の上に乗っかる身はつらいですよ。緊張しています。

内藤　僕は厳しくないですよ、優しいはずです(笑)。では、最初にお伺いしますが、建築家が書く場合とプロフェッサー・アーキテクトが書く場合、長谷川堯さんのような歴史家・評論家が書く場合、そして、いわゆるジャーナリストというか、宮内嘉久さんのような方が書く場合と、それぞれ違いますよね。建築家の場合はつくりながら、つくられたものを背負って書きます。それから、前川（國男）さんや宮内さんがお嫌いなプロフェッサー・アーキテクト、でも私は今、プロフェッサー・アーキテクトの立場にいますので具合が悪いのですが、この場合、半分は純粋で半分は建築家…という中途半端な立場です。宮内さんは、それらとは違う立場でずっと書かれてきたわけですけど、どういう差異がありますか。

宮内　おっしゃるように、立場、立場で書く姿勢も中身も違ってくるのは当たり前だと思いますが、僕自身のことで言いますと、僕は“一編集者”なんですね。若い頃に志して、その立場でずっと仕事をしている。建築家と同じようにものをつくるわけですから、編集者はつくったものがすべてで、それによってその人の評価が問われると思うんです。例えば、僕の場合は『建築年鑑』[＊1] をつくった。それがどんなものだったかがすべてで、それ以上の言説は、いわば余分なこと…というふうに見られがちです。しかし、僕は一編集者と考える前に、建築の領域でジャーナリズムをつくり出さなきゃダメじゃないか、建築ジャーナリズムを確立しないと建築そのものがダメになる、という若気の至りの想い込みに走りまして、大学を出る前から「ジャーナリズム、ジャーナリズム」と口走っていた男なんです。では、建築ジャーナリズムを確立する基本は何かというと、“批評精神”なんです。これは戸坂潤 [＊2] に教わったと思いますが、僕も、そうだと想い込んできました。ですから、そういう観点に立つと、ものを言わざるを得ない。単に編集するだけではなくて、書くこともしなければならない。もう一面は、編集者というのは、人さまの知恵とか力を借りて“もの”をつくるわけです。それは良い言葉でいえば、指揮者、オーガナイザーなんですね。つまり、オーガナイザーである編集者の立場から書くものというのは、建築家とも歴史家とも批評家とも違うだろうし、新聞記者、いわゆるジャーナリストとも違う。そういう想いが始めからありました。その上で書いてきたつもりです。

内藤　例えば、“ジャーナル”という行為と、“クリティック”という行為、この辺の関係はアンビバレンスなところがありますね。

宮内嘉久氏

宮内　それは良い問い掛けだろうと思いますが、微妙なところですね。僕自身は、ジャーナリズムの確立を…と思い、事実そうしてきたにもかかわらず、ジャーナリストと呼ばれるのは嫌なんですよ。

内藤　ジャーナリストは報道記者ですよね。できるだけ事実を正確に他者に伝えるのがジャーナリスト。

宮内　ですが、そうじゃない悪しきジャーナリストがいっぱいいますからね。ちょっと話が飛びますが、僕の気持の中では、“大学人に対する不信”から始まっているんです、実をいうと。

内藤　それは大いに伺いたいところです。何があったんですか？

宮内　“ジャーナリズムの確立を”、に至るまでの話です。それは『建築ジャーナリズム無頼』[＊3] にも書いている話ですが、敗戦直後、1945年の8月15日の後の秋の学期が始まった最初の授業でした。僕は本郷の友達から噂に聞いていた“キーチャン”こと、岸田日出刀教授 [＊4] が、どんな講義をするのか聞きたいと思いまして、「建築意匠」の講義をのぞきに行ったんです。そうしたら黒い太縁の眼鏡を掛けた岸田教授がスタスタと教室に入ってきて、いきなり黒板に向かって大きな文字で「DEMOCRACY」と全部大文字で書いた。そして学生の方に向き直って「これからの建築は、デモクラシーの建築だよ」とひと言おっしゃった。それを聞いた瞬間、僕は「何だ!?」と思ったんです。だって、たった2、3年前の戦争中に『ナチス独逸の建築』[＊5] の著書を出した張本人は岸田教授なんです。ナチス建築讃美、とまではいかないにしても、時流に乗ってそういう本を書いた人間が、敗戦後に教壇に立って「これからの建築はデモクラシーだ」なんてのたまう前に、自分の立場についてひと言、釈明があってしかるべきだと思ったんです。僕は心底、怒りを覚えて、後の話はとても聴けなかった。そのままエスケープしちゃったんです。それが「もう信用ならん」と思った最初です。この時に、基本的に大学人の言説に対する不信感が埋め込まれちゃったんですね。

内藤　でも、宮内さんは、東京大学第二工学部 [＊6] 時代は関野克（まさる）先生 [＊7] を尊敬されていたでしょう。全部の大学人が、ノーというわけではないですよね。

宮内　それはそうです。前川さんも言っていますが、大学人だからダメだというようなバカな話ではなくて、人としてどうかということですよ。カテゴリーで区別するのはナンセンス。

内藤　良かった（笑）。

東京大学第二工学部 建築学科

内藤　宮内さんは、“二工”へお入りになりますね。何年ですか？

宮内　1944年の秋、『無頼』には、まぐれで入ったと書きましたが、とにかく入学したわけです。二工は西千葉の一角に兵舎みたいな木造のバラックが建っていたんですが、建築学科はその敷地の隅に離れてあって、雰囲気が非常に伸びやかで、風通しが良いことはすぐに感じました。例えば、先生を“さん”で呼んでよろしい、先生とは言うな、とか。ですから“小野（薫）さん [＊8]”、“関野さん”で通っていたことにも表れているように、本郷のあのネオゴシックの石造りの教室の雰囲気とは全然違いました。

内藤　重苦しい本郷の伝統から離れて、ある種、アカデミズムの理想型みたいなものが、瞬間的にあそこに出来たということなんでしょうね。

宮内　それは言えると思います。やっぱり今の言葉でいえば、自由な雰囲気がつくられていた。その貢献者は、建築学科の創設に当たった、小野さんだと思うんですよ。僕は関野さんの部屋に入り込んでいましたけど…。

内藤　所属は関野研究室だったんですか？『無頼』には、関野先生と小野先生の話を書かれています。

宮内　小野さんは二工の建築学科を設立した責任者ですから、客観的に見ても二工にとっては一番大事な人なんです。構造学者で、前川さんより2年先輩です。そして、構造学者にもかかわらずデザインもうまいし、非常に見識の高い方だった。ただ、二工は小野さんが中心になってつくられたと聞きますが、いわゆる佐野利器 [＊9] を始めとする本郷の構

[＊1]『建築年鑑』（美術出版社（1960〜65）→建築ジャーナリズム研究所（1968,69））
▸▸▸図版p.34
建築界についても、年に一度は歩いてきた跡を振り返ってみることが大事、と考えてつくった刊行物。構成は、Ⅰ・展望、Ⅱ・作品、Ⅲ・焦点、Ⅳ・資料（宮内）

[＊2] 戸坂 潤（1900〜45）
哲学者／東京生まれ。京都大学在学中は西田幾多郎に師事し、新カント主義の観念論哲学の立場にあったが、後にマルクス主義の唯物論哲学に転じた。治安維持法違反により検挙され、敗戦直前に長野刑務所で獄死

[＊3]『建築ジャーナリズム無頼』
▸▸▸図版p.18,19

[＊4] 岸田日出刀（1899〜1966）
東京大学に在籍、戦前から戦後にかけての建築アカデミズムの中心的存在。O.ワグナーを中心とする欧州近代建築史の研究で学位を取得。歴史主義が主流であった戦前期からモダニズムを擁護する姿勢を取り、前川國男、丹下健三ら近代建築家を育て上げた。東京オリンピックの際には施設特別委員長を委嘱され、企画運営に関して強い影響力を発揮した（大川）

[＊5]『ナチス独逸の建築』岸田日出刀著（相模書房　1943）

[＊6] 東京帝国大学第二工学部
戦時下の1942年、技術要員増強のため、本郷の第一工学部とは別に、西千葉に創設された。“二工”とも呼んだ（宮内）

[＊7] 関野 克（1909〜2001）
日本および東洋建築史研究の先駆者である関野貞の長男。1942年に東大教授。日本建築史を専攻し、従来の建築史を技術史、生産史の観点から再構築することを試みた。
東大の第二工学部は、後に生産技術研究所と名称変更される。建築史分野では、本郷とは異なった独特の学風を確立、その後を村松貞次郎、藤森照信が受け継いだ（大川）

[＊8] 小野 薫（1903〜57）
東大卒業後に震災復興計画を進める東大営繕課に勤務、内田祥三の右腕として活躍した。1930年、佐野利器に請われ日大に招かれ、戦前、戦後を通して教授を兼任。満州国大陸科学院の主任研究官を経て、1942年には、東大第二工学部の教授。構造力学、特に架構力学の権威であり、難解な分野を一般に啓蒙する能力にたけていた。優れたデザイン力を併せ持った天才的構造家と評される一方、親分肌の人柄で多くの人々に慕われた（大川）

[＊9] 佐野利器（1880〜1956）
辰野金吾に次ぐ建築界の巨頭。学会、官界に絶大なる権勢を誇った。学者としては、耐震工学の国際的規範を確立した先駆者であり、また建築に関する行政施策全般を進展する上で強烈な推進力を発揮した。帝都復興院建築局長として震災復興事業にかかわり、次いで東京市建築局長に就任して、耐震耐火の都市づくりを推進。市街地建築物法、都市計画法の制定にも尽力した。日本大学高等工学校（現・理工学部）の初代校長（大川）

[＊10] 太田博太郎（1912〜2007）
建築史家。特に日本建築史、住宅史、民家史、文化財保存の分野に大きな足跡を残した。東大、九州芸工大、武蔵大で教鞭を執り、各地の歴史的建造物の保存・修理にかかわるなど、日本建築史全般にわたる研究・教育・実践の第一人者（大川）

[＊11] 高山英華（1910〜99）
内田祥三の下で、戦前期は満州の都市計画に従事。その経験を基に、日本における近代都市計画の先駆者となった。都市計画、地域計画の研究者として全国の多くの都市計画に関与。東大の都市工学科の創設にも尽力。マルキストであったことを背景に、戦後のアカデミズムの中核となった。人間的魅力と抱擁力にも定評があり、新建築家集団の初代会長、日本建築学会会長などを歴任（大川）

埼玉県立博物館
（現・埼玉県立歴史と民俗の博物館）
設計：前川國男建築設計事務所
所在地：埼玉県さいたま市高鼻町4-219
規模：地下1階、地上3階
構造：RC造
竣工：1971年
（1993年撮影）

右――中庭からエントランスを見る
下――ガラス越しにエントランスロビーを見る

造学派からはじき出されたのかもしれないんです。第二工学部をつくるからやりなさいと。他には太田博太郎さん［＊10］が歴史、高山英華さん［＊11］が都市計画を教えていました。

内藤　高山英華さんも本郷じゃなくて二工だったんですね。

宮内　二工で講義を始められた直後に僕は習いまして、非常に新鮮な雰囲気のノートを取りましたよ。それから残念だったのは内田祥文（よしぶみ）［＊12］。内田祥哉（よしちか）さんのお兄さんですが、意匠設計の講師で来ていたんですが、戦後すぐに病気で亡くなったんです。丹下健三と同世代だから、内田祥文が生きていたら丹下さんも少しは変わったかもしれないという思いがありますね（笑）。

内藤　とにかく、宮内さんがジャーナリズムを目指したのは、岸田教授の講義を聴いた時の怒りが出発点になったわけですよね。

宮内　一つのバネにはなりました。でも、それは単なるきっかけの一つにすぎないです。基本は、僕が学部の1年生であるにもかかわらず、関野研究室への出入りを許されたことですね。研究室には蔵書がいっぱいありましたし、雑誌も揃っていた。例えば、大正末年に創刊された岩波の『思想』の合本が創刊号から全部、研究室に揃っていたんです。今でも岩波から出ていまして、この夏、1000号記念が出るそうですが、その『思想』を僕は全部見ることができた。それが最初のきっかけですね。そこで三木清［＊13］、林達夫［＊14］、羽仁五郎［＊15］、戸坂潤とか、1930年代の言説を全部読むことができた。それでものすごく影響を受けたんです。

内藤　その中に、谷口吉郎さんの文章があったんですね。『無頼』に書いてありました。

宮内　そう。「ル・コルビュジエ検討」［＊16］です。

［＊12］内田祥文（1913〜46）
佐野利器に次ぐ建築界の巨頭である内田祥三の長男。日大卒。国民住宅コンペ（1941）など戦時中の数々のコンペで入賞、その才能が注目された。都市計画にも関心が高く、ル・コルビュジエの『ユルバニズム』に深い理解を示していた。父親の研究を受け継ぎ、木造家屋の防災を研究テーマとして学位を取得。『建築と火災』（相模書房　1942）の著作もある。戦後すぐに行われた「復興都市計画コンペ」に参加し「深川地区」と「新宿地区」の両案ともに1等当選。栄養失調と過労がたたり、日大の研究室にて夜間に発病、翌日クモ膜下出血で32才の生涯を閉じた（大川）

［＊13］三木 清（1897〜1945）
哲学者／兵庫生まれ。西田幾多郎、ハイデガーに師事。京都学派を代表する哲学者
［＊14］林 達夫（1896〜1984）
思想家・評論家／東京生まれ。三木清との親しい交友は有名。「共産主義的人間」（『文藝春秋』1951）でフルシチョフによるスターリン批判（1956）に先駆けて共産主義批判を行った
［＊15］羽仁五郎（1901〜83）
歴史学者／東大を中退して渡欧、ハイデルベルク大にて歴史哲学を学び、1924年に帰国。自由学園の創設者の子、羽仁説子と結婚し、旧姓（森）を改めた。『転形期の歴史学』（鉄塔書院1929）や『歴史学批判序説』（中央公論社1946）は、マルクス主義史学の体系を樹立した歴史理論として知られる。1933年に治安維持法違反で検挙され、日大教授の職を辞した。他に『都市の論理』（勁草書房　1968）など（大川）
［＊16］谷口吉郎「ル・コルビュジエ検討」『思想』1930.12

これは大学院生だった谷口吉郎さんが書いた文章ですが、林達夫が編集長をやっていた時代に『思想』に載せたんです。素晴らしいことですよね。内容がル・コルビュジエ批判で、かなりマルクス主義の影響を感じさせる文章でした。強い刺激を受けました。

休学、そして復学

内藤　宮内さんの卒業論文は、「近代日本の建築イデオロギー―ジャーナリズムを透して」[＊17]ですね。その前に「建築ジャーナリズム・序説」[＊18]をお書きになっている。

宮内　それは未定稿で放ってあります。

内藤　いずれそれは…。

宮内　この『無頼』がその答えでしょうか。

内藤　この卒論はどんな内容だったんですか。

宮内　ご存じないかもしれませんが、卒業論文は『少数派建築論』[＊19]という僕の最初の著書の最後に収めました。非常に幼い文章で、自分自身でも随分ためらったんですが、実は、二工が“生産技術研究所”に切り替わるゴタゴタの時に卒論を提出しているんです。せっかく書いたのになくされたらかなわんと思って、登録だけして本文を持ち帰ったんです。読み返してみたら、まあ活字にしても罰が当たらない内容かなと思いまして載せました、全文。

内藤　それは失礼しました。このインタビューでは、事前に3冊読むことにしているんですが、『少数派建築論』は、まだ読んでいないんです。

宮内　いつか見てください。それと、こちらの冊子[＊20]にはディプロマも載せてあります。

内藤　これですか？うまいじゃないですか。宮内さんは、一時、大学を休学していらっしゃった時に、竹中工務店にお勤めになるんですよね。

宮内　そう。竹中の沼津出張所に雇ってもらったんです。

内藤　そこでパースとか、そういう図面を描いていたんでしょ。

宮内　パースを描かされていましたね。店舗とか、幼稚園とか。

内藤　やっぱり…。手慣れた感じですよ（笑）。

宮内　1948年のディプロマですよ。建物より、前を走っている車の颯爽たるデザインを見てください！

内藤　この写真では車はよく見えませんね。宮内さんは設計をやろうとは思わなかったんですか？

宮内　建築学科に入って好きになった科目は設計ですね。コピーから入りまして、前川さんの自邸[＊21]のコピーもしましたし、住宅の設計もやらされました。2年まで学部にのほほんと行きまして、設計も好きになりかけたところだったんですが、2年が終わる段階でおやじが病気になりまして、家庭の事情で大学はもう続けられない、休学する他に方法がないという状況になって、休学したんです。それまでは“総領の甚六”で、古本屋に行っちゃ本を買って…というのんきな生活をしていたのが、急に状況が悪くなりまして、東玉川に住んでいた家も売らなきゃいけない顛末に追い込まれ、湯河原に引っ越したんです。そして一家6人の生計を立てるために、沼津にある竹中工務店の出張所で臨時所員にしてもらいました。それ以後、どうするかについては随分、思い悩んだのですが、もちろん設計の仕事に就こうかどうかも悩みました。好きになっていましたし、デザインがそんな下手でないと思っている自分もいましたので…。だけど既に大高（正人）、河原（一郎）、増沢（洵）とか、親しくしていた友達は卒業して立派な仕事をしていましたから、その連中と比べたら沼津の出張所辺りで働いている男が勝負になるわけがないと思って、設計をあきらめたんです。

それで万策尽きて、小野さんのご自宅に相談に行ったんです。小野さんは「分かった。君に向いている出版社を紹介しよう」と誠文堂新光社から創刊したばかりの雑誌『生活と住居』に紹介して下さったんです。この雑誌には、小野さんが監修して、池辺陽[＊22]、神代雄一郎[＊23]、山本学治[＊24]たちがかかわっていたんですが、小野さんの紹介で、運良く誠文堂の準社員になれたわけです。その機縁で、編集者になる決心をしたんです。

内藤　二工に浜口（隆一）さん[＊25]が講師で来られていたでしょう。その影響はなかったんですか？

宮内　それはなかったですね。浜口さんが来られた時は、僕は休学していて、いなかったんです。実は、小野さんに相談に行った時に、帰り際に、「大学だけは出ておきなさい」と言われたために、休学の届けを出していたのですが、誠文堂の社長さんが理解ある方で、編集の仕事は波があるから、時間がある時に勉強して、大学を卒業できないのかと言って下さったことがきっかけになって、なんとか復学する道を探りまして、卒論とディプロマをまとめれば卒業できるところまでいきました。その段階になって、関野研究室から卒業論文を出させてくださいとあいさつに行った時に、初めて浜口さんにお会いした。新任の講師でいたんです。

内藤　戦後のいわゆる建築ジャーナリズムといいますか、思想、言説史でいいますと、浜口さんは一つの柱だったでしょう？

宮内　花形でしたね。

なぜ、廃墟なのか

内藤　建築ジャーナリズムの流れから宮内さんの今までを振り返ると、大きな節目が幾つかありますね。

上――『少数派建築論 一編集者の証言』
下――『廃墟から―反建築論』

『一編集者の記録 1948-1999』

「負ければ賊軍」（『国際建築』1931.6）

[＊17] 宮内嘉久「近代日本の建築イデオロギー―ジャーナリズムを透して」（『少数派建築論』p.252～に所収）
[＊18] 冬宮章（宮内嘉久）「建築ジャーナリズム・序説」
[＊19] 『少数派建築論 一編集者の証言』（井上書院　1974）▸▸▸図版左上
[＊20] 『一編集者の記録 1948-1999』宮内嘉久著（宮内嘉久編集事務所　2000）▸▸▸図版右上
[＊21] 前川國男自邸（1942）前川國男

[＊22] 池辺陽（1920～79）
東大卒、坂倉建築研究所を経て東大生産技術研究所教授。建築計画学および生産学の分野で活躍。建築モデュールの研究を通じて、空間の寸法体系理論を確立し、建築の工業化の推進を図った。戦後、小住宅設計の先駆者として、一連の実験住宅の設計を試みた（大川）
[＊23] 神代雄一郎（1922～2000）
東大を卒業後、特別研究生として近代建築史を研究。1949年から明大で教鞭を執る。近代建築思潮形成過程の研究に取り組み、かつ積極的に建築評論の分野においても活躍し、「巨大建築論争」を巻き起こした。晩年は日本の伝統的建築の空間論的考察を志した（大川）
[＊24] 山本学治（1923～77）
東京芸大建築科教授、建築史家。技術史の観点から見た建築史の構築を試みた。構造、空間、形態のバランスに力点をおいた建築の評価を追及。『素材と造形の歴史』（鹿島研究所出版会 1966）や『巨匠 ミースの遺産』（共著、彰国社 1970）、『現代建築と技術』（彰国社　1971）などの名著を残した（大川）
[＊25] 浜口隆一（1916～95）
建築評論家。東大建築学科を卒業後、大学院で建築理論、近代建築史を研究する一方、前川國男建築設計事務所で前川に師事。1948年、東大第二工学部助教授。1944年に「日本国民建築様式の問題 建築学の立場から」（『新建築』1944.10）で建築評論家としてデビュー。後には東大を辞し、建築評論家として独立、建築ジャーナリズムの中心的存在となった。1947年に書かれた『ヒューマニズムの建築―日本近代建築の反省と展望』（雄鶏社）は戦後建築の指針を示す本として話題を集めた（大川）

[＊26] 『廃墟から―反建築論』宮内嘉久著（晶文社　1976）▸▸▸図版左下
[＊27] 灰地啓（宮内嘉久）「内側の焦土」『焦土』第4号
[＊28] 「廃墟から」（個人誌、第1号,1970.11.8～第39号,1979.8.15、再刊第1号,2002.3.10～第20号,2005.8.15）▸▸▸図版p.34
一編集者としての自立を自ら支えるためにつくった。初めは特定の読者100人に配布。「宛名のない手紙」、「ロゼッタ断章」、「共有回路」などから構成される。現在はハガキ型の「廃墟通信」（No.1,2005.9.30～）として季刊発行（宮内）
[＊29] 世界デザイン会議
（『INAX REPORT』No.171、p.23参照）

大学への不信があって、その後は、まず“廃墟”ですか？『廃墟から』[＊26]では、大空襲の後の焼け跡の話をしていらっしゃいますね。青山、表参道の辺りの風景。実は大谷（幸夫）先生も同じように、表参道と青山通りの交差点の辺りは、ひどい状況だったという話をされていました。そういうことを、今の若い人は想像だにしない。今、そこはどうなっているかというと、それこそ現代建築家の陳列場みたいになっている。僕はこのことが非常に象徴的な出来事のように感じられます。そこで、その原風景のお話をちょっと語っていただけたらと思います。

宮内　確かに大事な問題ですね。それを今日のテーマの『無頼』と関連付けてお話しますと、戦後の建築ジャーナリズム史を考える時に、僕の中では、まずは“廃墟”、次に1968～69年の“大学闘争”、これが分水嶺なんです。これに関連して僕自身の“「建築ジャーナリズム研究所」の解体”があります。そして3番目は21世紀の初めの“9.11”これが大きな節目ではないかと思っています。1945年、僕が目にした東京大空襲の焼け跡、廃墟というのは原風景なんです。建築ジャーナリズムの原点がそこにある、と僕は言わざるを得ない。このイメージを何とか今の世代の人たちと共有したいという願いがずっとあるんですが、非常に難しい。同世代だって見ないヤツもいたし、見たって忘れているヤツもいっぱいいるわけですから、必ずしも若い人たちの問題じゃない。しかし、これからの建築、都市、街の佇まいをどうイマジネーションするかを考える時に、僕は、廃墟に一度、立ち返らないといけないと思っているんです。そして、そのことを共有化したい。

内藤　3月10日と5月25日の東京大空襲ですね。

宮内　そうです。5月25日のB29の山手の絨緞爆撃の日、僕の高等学校の友人が焼夷弾の直撃を背中に受けて死んだんです。翌朝、その知らせを受けて、当時、住んでいた東玉川から、青山の高樹町まで歩いて行ったわけですよ。歩く以外に手がなかった。そして焼け残りの材木を友達みんなで集めて、それを組んで荼毘（だび）に付した。その時の色と臭いが忘れられない。そして途中で見た渋谷、表参道、青山一帯の焼け跡には、まだ火がくすぶって残っていた。木造家屋は全部焼け落ちて、小さなビルは外側が焼け焦げて、中はがらんどうになっていた。遮るものが何もなくて、非常に無残な光景がずっと続いていたんです。それをまざまざと見たわけです。その焼け野原の遥か西の空に、富士山が真っ白い雪を頂いて、近々と見えたんですよ。しかし、イマジネーションの話に戻りますと、確かに“廃墟”、“焼け跡”、“焦土”は、ものとしては何もない無残な状態だけど、反面、そこにはどんな絵も描けるキャンバスというか、非常に大きなエネルギーを秘めていると思ったんです。

今、新宿の西の空は超高層で覆われていて富士山が見えない。僕のイメージの中では、あの超高層を全部ぶっつぶして、西空に富士山が近々と見えるイメージを描いて、その空間にどのような街をつくろうか、というイマジネーションを持つべきじゃないか、それが僕の一編集者としての提案なんですよ。それは『無頼』でもそうだし、今まで一貫して言ってきた。僕の中ではそれしかない。一体、建築家は何をしているのかということですよ。

内藤　その時、焼け跡じゃなくて、なぜ“廃墟”だったかを伺いたかったんです。廃墟という言葉は僕の中ではローマとかギリシャを想起させる西洋的な廃墟のイメージがあるんです。日本は木造文化ということから、そういう廃墟にはなりにくい。ところが、“廃墟”という言葉は宮内さんのキーワードですね。ところが宮内さんの廃墟のイメージを読むと、焼け跡で、何もない光景がずっと続いているでしょう。なぜ、焦土でなくて廃墟なんでしょう。その辺りはいかがですか？

宮内　そうですね。僕は「内側の焦土」[＊27]という文章をかつて書いていますけど、確かに、“焼け跡”、“焦土”、“焼け野原”という方が、日本という木造文化の国にはふさわしい。それは認めざるを得ない。ただ、これから先のイメージを描く時には、焦土というよりは“廃墟”にした方がいい。つまり、何で僕が廃墟という言葉にこだわるようになったかというと、「廃墟から」[＊28]を出そうと思った時からだったと思います。

内藤　あの「宛名のない手紙」をまとめて、『廃墟から』を出版された時ですか？

宮内　本ではなくて、B4二つ折りのガリ版刷りの個人誌の方です。1970年11月8日に第1号を出したんです。その時はもう超高層が富士山をふさいで建っていた。さっき言ったように、超高層はぶっ壊さなくちゃいけない、という僕のイメージが具体的に頭にありまして、それが“廃墟”なんですよ。

内藤　強烈なイメージがあの言葉の裏側に込められているんですね。

大学生の問いに刺し貫かれた

内藤　やっぱり大学闘争の時のお話を伺わないわけにはいきません。70年前後、68、9年ですね。60年安保はあんまり…。

宮内　60年安保は社会的には大きな節目ですが、建築界はあんまり…。それから、世界デザイン会議[＊29]は、だいぶ騒がれたけど、僕は全然認めていなかったんです。なぜって、「日本の中ですらデザインと建築とのかかわり方の議論もないのに、いきなり世界のデザイナーを呼んで議論してもしょうがない」とそっぽを向いていました。

内藤　面白いことに、60年の世界デザイン会議。

世界平和記念聖堂
（現・カトリック幟町教会）
設計：村野藤吾
所在地：広島県広島市中区幟町4-42
規模：地上3階
構造：RC造、木造
竣工：1953年
（2006年撮影）

左ページ――南面外観
上――西面全景

［＊30］日本万国博覧会
大阪の千里で開催された日本最初の国際博覧会。1970年3月15日から183日間、76ヵ国124団体が参加、入場者数は6,421万人に達した。建築家やデザイナー、芸術家を巻き込んだ文化イベントの先駆けともなった（大川）
［＊31］『国際建築』（国際建築協会→美術出版社（1962.6～67.6））▸▸▸図版p.34,35
宮内嘉久の編集責任は1964.7～67.6
［＊32］東京帝室博物館コンペ（1931）
▸▸▸図版p.28上
日本の近代建築史上、歴史主義とモダニズムの分水嶺となった設計競技。応募要項が発表された時点で“日本趣味を基調とする東洋式とすること”という様式規定に対し、日本インターナショナル建築会から応募拒否の声明と批判が出され、建築界に波紋を投げかけた。ル・コルビュジエの下から帰国して間もない前川は、落選覚悟でモダニズム理論に即した提案を応募。『国際建築』誌に「負ければ賊軍」の文章を寄せて注目された（大川）
［＊33］前川國男「負ければ賊軍」『国際建築』1931.6（後に『一建築家の信條』p.233～に所収）
▸▸▸図版p.25右下
［＊34］東京海上ビルディング本館（1974）前川國男建築設計事務所　▸▸▸図版p.32
［＊35］美観論争（1965～67）
丸の内駅前に建つ「東京海上ビル」の建て替えに当たり、前川國男建築設計事務所の設計で改築計画が進められていた。同時期、東京都の「美観条例」構想が新聞に発表。容積制限に基づき高層化を図り広場を獲得する前川案と、高さ制限を課し丸の内に軒高の揃った街並みをつくることを意図した東京都の美観条例が衝突。公共性を軸に、一方は“広場”、他方は“美観”を主張した（大川）
［＊36］「敗北の記念碑としての東京海上ビル」『建築』1974.6
［＊37］埼玉県立博物館（1971）前川國男建築設計事務所　▸▸▸図版p.22
［＊38］熊本県立美術館（1977）前川國男建築設計事務所
［＊39］弘前市斎場（1983）前川建築設計事務所、ミド同人 仲邑孔一　▸▸▸図版p.30
［＊40］『一建築家の信條』前川國男著、宮内嘉久編（晶文社　1981）▸▸▸図版p.28左下

70年の万博［＊30］。オリンピックを真ん中にして、面白いぐらいに一致しているんですよ。社会運動的なものとそういうイベントが。

宮内　デザイン会議はたまたま重なっただけだと思いますが、70年の万博は、意図的に結び付けた。それは丹下さんですよ。

内藤　現象的には、建築家は表で踊るだけのことで、もうちょっと大きな意図があったと思います。70年万博は、僕は“踏み絵”だったのではないかと思っています。社会運動的な動きが60年代にあって、どうなんだと言った時に、万博では、こんなにたくさんの人が来ると…。つまりそれは踏み絵ですよね。日本がある種、商業国家の方向に向かう時に、どっちなんだ、という踏み絵…。

宮内　おっしゃるとおり。僕もそう思いますね。

内藤　その踏んだ踏み絵のその道で、ずっと今まできている。

宮内　70年万博の前に、68、9年の大学闘争があったでしょう。それとほぼ平行して、ヨーロッパではパリの五月革命、アメリカではブラック・パワーが爆発したし、中国では文化大革命…、というように、世界的な大きな流れがあった。その流れの中で、日本では大学闘争が起きたんです。特に建築学科と医学部の学部生、大学院生が最初に声を挙げた。これが“全共闘”の始まりです。最初の学生たちの、「大学は果たしてこれでいいのか」という問い掛け。これが大事なんです。それを推し進めていけば、新聞社のありようはこれでいいのか、裁判所や裁判官のありようはこれでいいのか、近代日本全部の枠組みに対してのエスタブリッシュメントに対する根源的な問い掛けになったわけです。それが単に、近代批判とか帝国主義批判、マルクス主義の側に立った問題提起とどこが違ったかというと、学生たちが自分たちのありようをこれでいいのか、と言ったからなんです。僕に言わせれば、主体と外の世界を刺し貫く問い掛けをしたのは、日本の近代の批判的運動の中で初めてですよ。実はそれに、僕も刺し貫かれたんです。戦後、ジャーナリズムをつくりたいとやり続けてきた。編集者たろうとして、『建築年鑑』をつくったし、『国際建築』［＊31］もやりました。しかし、改めてお前は何をやってきたのかと問われた、その衝撃はすごかった。自分が斬られたと思いました。それは言い方を変えると、「自分の立っている場所を問え」、ということですよね。学生たちの問いは、すべての人に当てはまるわけですよ、実は。

内藤　僕は60年代の後半は、体験していないので分からないんですが、その頃はほとんど建築界は反応しなかったんですか？

宮内　大学闘争には反応しなかったですね。

内藤　議論もなかった？

宮内　誰も彼もが70年万博にみんな吸い寄せられたんです。丹下さんの傘下に何とかのめり込もうと、建築家もデザイナーも躍起になったんです。肝心の全共闘の問題提起に答える姿勢はどこにもないままに流れちゃった。特権を持たない建築家を目指すべきだとか、果たして建築家のありようはこれでいいのか、何をやっていくべきだろうという問いを自らにしなくちゃいけないのに、やり過ごした。建築家のみならず、社会全般に反省はなかった。大学当局も、理性的アカデミシャンらしく答えを模索することは何にもしなくて、機動隊を導入して物理的・暴力的に解決しようとして、安田講堂の事件にまでいった。以来、日本人は今日、見るざまになりましたね（笑）。

内藤　その時、前川さんは、どういうふうに考えていらっしゃったんでしょうね。

宮内　僕が言うと、何か勝手に自分の想い込みを前川さんに当てはめていると言われちゃうかもしれないですが、僕が接した前川さんからすれば、前川さんも、実は、刺し貫かれた人ですよ。なぜかというと、落選覚悟で「帝室博物館」のコンペ案［＊32］をつくって提出した人ですよ。そして、その当人が発表の時に「負ければ賊軍」［＊33］を『国際建築』に出した。その心は、「自分は一人でも戦う、君たちも戦うべきではないか」なんですよ。30年前にそういう呼び掛けをした男が、全共闘の呼び掛けに撃たれないわけないじゃないですか。僕以上に前川さんは撃たれたと思う。しかも「東京海上」［＊34］では超高層問題で景観論争［＊35］をしている前川さんがいたんですから。

内藤　ちょうど重なっているわけですね。両方とも負けましたけど。

宮内　そうです。しかも「超高層は疑問だ。大きなものは胸につかえるね」［＊36］と前川國男は言ったわけですよ。で、「近代建築はもうダメだ」と言った前川國男がいたわけよ。それでどういうふうに自分の仕事をするかに苦しんで、「埼玉県立博物館」［＊37］、「熊本県立美術館」［＊38］、「弘前市斎場」［＊39］を設計する前川さんが生まれた。それはやっぱり学生にグサリとやられているからなんです。日大全共闘の自主講座に、前川さんはバリケードを越えて行ったんですよ。そして僕も前川さんに同調したから、前川さんとなら語り合えると思って20時間ものロングインタビューを録った。それが『一建築家の信條』［＊40］です。

無惨に終わった「巨大建築論争」

内藤　話は前後しますが、超高層の話でいえば、神代さんは同級生でいらしたんですか。

宮内　いや、2年先輩です。

内藤　この論争の時、僕は学生だったんですが、

今回「巨大建築に抗議する」[＊41] を引っ張り出して、もう一回読み直しました。林昌二さんの「その社会が建築を創る」[＊42] も読みました。この辺りは、なかなかデリケートなところが多い。宮内さんはこれをどういうふうにお考えですか？今の若い人たちは当時の状況をほとんど知らないですから、簡単に紹介していただけますか。基本的には神代さんが「巨大建築に抗議する」という論文を発表されて、林さん、池田（武邦）さんが反論を書かれた [＊43]。宮内さんは戦後、建築界に言説の行き交う論壇をつくりたいと思っていらっしゃったと思うんですが、結局それは、ある種、この論争を契機に不毛なかたちで終わったといえなくもないと思うんですが。

宮内　僕は「『巨大建築』論争の我流総括」[＊44] という文章を「廃墟から」に書いて、それを『新建築』に再録しました。それをぜひ読んでください。僕は神代さんが、それまで誰も言わなかった“巨大建築批判”をしたのは、非常に良かったと思います。ところがその中で、僕も「あっ」と思ったのは、ひと言、青いガラスの養生シートのことを誤認して書いちゃった。それを林さん以外の神代批判の建築家たちは、鬼の首でも取ったかのように「批評家にあるまじき誤認だ」とか、「こんな認識でものを言ったらダメだ」と言いまして、肝心の“巨大建築が是か非か”という、神代さんが提起した問題をそっちのけにして、“青いガラス”一辺倒で神代さんをたたくかたちになったんですね。本当は、神代さんの味方をしなくちゃいけないアトリエ派の建築家連中も含めて、神代批判に回ったんです。巨大建築をやっている日建設計、その他を批判しなくちゃいけないだろうと思う立場の連中までみんな。僕はイライラしていた。それで、神代さんは1年たって2度目の文章 [＊45] を書いたんです。それにひと言、青いガラスの誤認について謝ればよかったのに、ひと言も触れなかった。それも僕はダメだなぁと思いました。そうしたら、2度目の文章を読んで、村松（貞次郎）さん [＊46] が乗り出したんですよ。ある日、届いた雑誌を見たら、神代さんへの個人攻撃、人身攻撃に等しい、ぶざまで品のない言葉で神代批判をしていたんです [＊47]。しかも、東京大学教授という肩書きで書いたんです。

内藤　僕もそれは覚えています。

宮内　それで僕は「許せない、村松貞次郎をたたかなくちゃいけない」と思いましたね。でもその時に、客観的に論争自体がどうだったかを言わざるを得ませんから、僕は神代さんの論文を片方に置き、反論の側では唯一、林さんが当事者として妥当な発言をしていると言いました。“青いガラス”なんてことは、あえて黙殺して、ちゃんと矜持を保って書いた。

内藤　林さんの言われていることは、その立場で筋が通っていましたね。

宮内　それなりの筋を通している。現実派としての主張でしたね。そして、その両方を突き合わせた先に、「巨大建築論争」が延長するなら意味があるのに、何事かと書いたんです。

内藤　実際は、その後どうなったかといいますと、あの手の議論が封じられたんですね、あの辺りで。

宮内　逆にそうなっちゃったんですね。

内藤　その後、超高層がいくら建とうと、論じられることはない。それは今に至る問題点ですね。

宮内　本当におっしゃるとおりです。一般のジャーナリズムでもっと議論されなくちゃいけないのに、建築ジャーナリズムがぶっ壊したところがある。

内藤　本当は、あそこでしっかりした議論の土台を提供しなくちゃいけなかったと思います。神代さんの言われていることは、僕は趣旨としてはもちろん共鳴するし、良かったと思うんですが、改めてあの文章を読むと、ややトリッキーにものを言っている。NHKホールの話から始まって「4,000人のオーディトリアムが…」という話から超高層を引っ張り出してきていますね。これはどちらかというと変化球で勝負しているようなものです。もっと正面から堂々と仕掛けてほしかったと思いました。

宮内　確かに、「建築家の大半はヘッポコ文士にも及ばない」とか、要らざるセリフが入ったり。

内藤　それからもう一つは、超高層について僕が思うのは、見たくないのに目に入るものに対して、パブリックという議論がどうして起きなかったのかなと…。一軒の家だったら、“向こう三軒両隣”ぐらいから見えるだけですが、超高層が建つと、見たくなくても見えちゃう。風景はパブリックなんですね。そこに否応なく現れる“姿”、“形”のありようが、建築界では全く議論されることがあの時以来なくなってしまった。何が言いたいかというと、宮内さんが望まれた建築の言説の往来という意味では、あれ以来、ほとんど無風状態できてしまった。結果として東京がどうなったかというと、バブルとその後の都市再生で、数百棟の超高層が建ち並んでいる。それはほとんど議論にならないまま、山のように出来上がってしまった。今や超高層の姿形は、誰も関心を抱かない無法地帯です。

宮内　無念極まりないですよ。

内藤　建築家もいわゆるアトリエ系の建築家たちも、あれは触れることのできない別のものだと思っているんでしょう。

宮内　それはプロフェッションの観点からいうとダメですよ、そういうアトリエ派は。建築家としてものを言うべきなんですよね。

丹下健三と前川國男の不思議な関係性

内藤　宮内さんは大学を卒業して、「NAU」[＊48] に行かれて、それから『国際建築』に行かれた。この辺りは生き証人ですね。そして「五期会」[＊49] の設立、57年にいわゆる新建築問題 [＊50]、それから美術出版社の大下（正男）さんと『建築年鑑』をつくられる。そして64年からもう一回、美術出版社の委託を受けて『国際建築』の責任編集をやられる…という経緯ですね。ところが、羽田沖の全日空事故で大下さんが亡くなられて、大きな影響を受ける。こうして見ると、波瀾万丈ですね。

宮内　そういうふうに挙げればいろいろとありましたけど、でもこれは誰の人生においても同じことですよ。山あり谷あり。僕の場合も同じで、取り立てて言うようなこともないんです。ただ、今日のメインテーマ『無頼』という点でいうと、今おっしゃっていただいたことは、僕個人の出発点であると同時に、戦後、建築のジャーナリズムの出発点にもなるわけです。まず“廃墟”を知った僕がいた。それから、“大学・アカデミーなるものへの不信感”ですね。アカデミーが真理探究の場であるとするならば、ジャーナリズムはアカデミーとは違った立場から、むしろそれとは対立しながら、しかし、批評精神を基に現実を照らし出すものでなくてはならない、というジャーナリズム像を抱いて僕は出発したわけですよ。アカデミー、大学人、プロフェッサー・アーキテクト、その他もろもろのことで不信感がますます募るばかりでした。具体的にいうと、丹下さんの存在はやっぱり大きかったですね。丹下さんのことは戦争中に知ったんです、後輩として。「本郷には丹下というすごいヤツがいるぞ」、「ル・コルビュジエにイカレていて、デザインがすごくうまいらしい」という噂は聞こえていました。当時は大学院生として本郷にいましたから…。

内藤　丹下さんは、宮内さんの何年上になられるんですか。

宮内　丹下さん、浜口さん、大江（宏）さんは、みんな1938年のご卒業。僕はすんなり卒業していれば1947年だから、世代的に、約10年違うんですよ、先輩なんですよ。

最初にお話しましたが、僕は関野研究室で『思想』のバックナンバーとか、明治以来の『建築雑誌』、『新建築』、『国際建築』などを手当たりしだいに見た中に『現代建築』もあったんです。この雑誌はほんの2年ぐらいでなくなったんですが、日本工作文化聯盟 [＊51] の機関誌として生まれて、当時の雑誌としては良い編集をした雑誌でした。その中に丹下さんの「MICHELANGELO頌」[＊52] が載っていて、僕はそれを読んだんです。書き出しは日本浪漫派もどきの文章で、ミケランジェロに託して、ル・コルビュジエを褒め称える、ル・コルビュジエ讃歌の文章だったんです。「ル・コルビュジエに傾倒して建築の道を選んだ男の文章としては見事じゃないか。噂どおりだ」と思いました。

ところが、たった3年後のコンペ、「大東亜建設記念営造計画」[＊53] に出して優勝した。具体的に丹下批判を胸に抱いたのは、その時ですね。それはル・コルビュジエの世界とは180度違う世界だったんです。3年前の文章に感心した僕は「何だ、これは!?」と思いました。それに加えて、戦後また、「広島ピースセンター」[＊54] を発表した。敗戦の8.15を挟んで、再び、ル・コルビュジエ的な世界に再転向した丹下さんがいたわけですよ。僕には「クルクル変わることに何の疑問も抱かない男だ」という固定観念が出来ちゃった。事実、その後も変わったでしょ。それは僕に言わせれば、前川國男がぶきっちょに、しかし内的アイデンティティに即して弧を描いて変わっていったそれとは全然違う変わり方なんです。そして言説も変わっていった。そういう丹下健三が、日本の建築家像としてもてはやされているのが我慢ならないという宮内がいたわけですよ。それに対する批判をしなくちゃダメだと。ところが、その後になっても、歴史家も含めてアカデミシャンたちは、日本建築史における客観的な丹下健三の位置づけすらしていない。前川國男との比較にしても、前川と丹下はどこがどう違うかということを歴史的に明らかにしていないじゃないか。『無頼』では前川像についても書きました。丹下さんの批判や丹下さんとの比較のことも書きました。しかし、それを近代日本建築史の中で、村野（藤吾）がいて白井（晟一）がいて前川がいて丹下がいて磯崎（新）がいて…とか、そういう流れの中でどう丹下を位置づけるか、どう前川を位置づけるか…を歴史家がやってくれない。いくら編集者、ジャーナリストがストーリーを書いたって、歴史家じゃないんだから無理だ。それをやってほしいわけです。

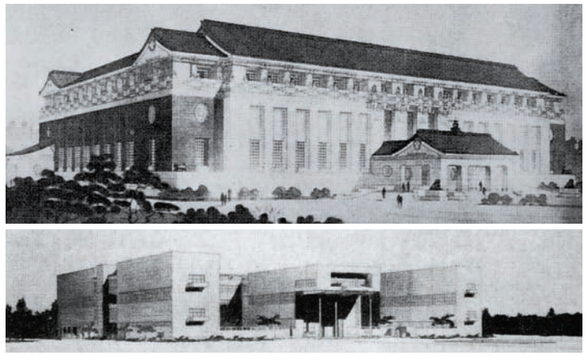
内藤　実際にはよく分かりませんけど、歴史家というのは、割と近いところはあまり扱わないっていう不文律があるんじゃないですか。

宮内　そんなことはないですよ。歴史は今日から振り返る。それが原則でしょう。

内藤　僕はどちらかというと、ジャーナリストのテリトリーじゃないかと…。要するに乾物になってなら歴史家だけど、まだ評価が分かれるなま物のところはジャーナリスト、多分そう考えられているところもあるんじゃないでしょうか。僕も歴史家が現代を、要するに、なま物を扱っても問題はないと思っていますし、確かに丹下さんの位置づけは、どこかでなされるべきだと思います。ただ、まだ亡くなられて間もないので、少し時代が遠ざかった時にきちっと位置づけることができるんじゃないでしょうか。その意味では前川さんと丹下さんの決着もまだついていないような気がします。

宮内　それはついていませんね。

内藤　扱うとすれば非常に面白いテーマですね。宮内さんが前川さんをずっと追い掛けている…という



東京帝室博物館懸賞設計
上――渡辺仁案（当選）、下――前川國男案

「巨大建築に抗議する」（『新建築』1974.9）

上――『一建築家の信條』
下――『建築・都市論異見』

［＊41］神代雄一郎「巨大建築に抗議する」『新建築』1974.9　▸▸▸図版左中
［＊42］林昌二「その社会が建築を創る」『新建築』1975.4
［＊43］池田武邦「建築評論の視点を問う」『新建築』1975.4
［＊44］宮内嘉久「『巨大建築』論争の我流総括」「廃墟から」第33号,1976.8.15（後に『新建築』1976.10に再録、また『建築・都市論異見』p.70～に所収）
［＊44の補注］『建築・都市論異見』（田端書店1984）▸▸▸図版左下
［＊45］神代雄一郎「裁判の季節」『新建築』1976.5
［＊46］村松貞次郎（1924～97）
東大第二工学部出身、東大生産技術研究所教授。建築史家。技術を軸に日本近代建築史の体系化を試みた『日本近代建築技術史』（彰国社　1976）を始め、日本近代建築史の分野に多くの業績を残した。浜口隆一とともにルポルタージュ『現代建築をつくる人々《設計組織ルポ》』（世界書院　1963）をまとめ、建設業設計部のありように一石を投じた「設計・施工一貫」の問題で話題を集めた（大川）
［＊47］村松貞次郎「部数の季節」『新建築』1976.8
［＊48］NAU（The New Architects' Union of Japan：新日本建築家集団）
「新日本文学会」その他と同じく、建築領域で結成された革新運動として初の全国組織。1947年創立。建築界の“進歩派”を糾合した一つの統一戦線（宮内）

［＊49］五期会
新日本建築家集団（NAU）に始まる戦後建築運動の一つ。1956年6月に結成、1960年4月には終結。辰野金吾に始まる日本の建築家の第五期世代との認識から、建築史家・村松貞次郎が命名。丹下研究室の大谷幸夫、前川事務所の大高正人など、当時20歳後半から30代前半の大学院学生や民間の建築設計事務所、あるいは有名作家事務所に働く若い人々約60名が参加。建築創造の正しい発展のために建築家の設計組織と、その社会的・経済的な条件の改善を旗印としていた。機関誌『設計｜組織』がNo.1（1957.12）～No.4（1958.12）まで発行（大川）
［＊50］新建築問題
（『INAX REPORT』No.167、p.22参照）
［＊51］日本工作文化聯盟
1936年、モダニズムを標榜する建築家たちによって結成。ドイツ工作連盟を念頭に、国家的観点からデザインや建築の問題を取り上げることを目標とした。1930年に新興建築家連盟を発足させながら、左傾化が指摘され、消滅してしまったことを反省点に、同メンバーにより体制寄りの組織として生まれた。斬新な編集内容を持つ機関誌『現代建築』の刊行が唯一の活動であり成果（大川）
［＊52］丹下健三「MICHELANGELO頌」『現代建築』1939.12
［＊53］大東亜建設記念営造計画コンペ（1942）
建築学会主催、情報局後援の第16回建築展覧会（南方建築展覧会）の行事の一つとして開催。審査員は岸田日出刀、前川國男など、当時中堅の近代建築家たちであった。1等当選は、当時大学院学生であった丹下健三。その提案は富士山麓に神域計画を想定したもので、他者の追随を許さぬアーバンデザイン的手法を駆使しつつ、かつ伝統と創造の問題に一石を投じるものであった。そのテーマと時期、建築家たちの見せた姿勢など、戦時中の建築界の様相を見事に示す（大川）
［＊54］広島平和会館記念陳列館（1955）丹下健三

よりも、そういう言葉を超えて近いところにいらっしゃる。だけど、本当は前川さんだけでは見えてこなくて、もう一つこちら側に丹下さんがいて、そこが明らかになると両方が明らかになるみたいな、不思議な関係性なんでしょうね。いずれ歴史が評価するはずです。僕は全否定じゃないですよ。丹下健三には偉大なところ、輝いていた部分がたくさんあります。それを冷静に認めないと批判もできない。

宮内　僕だってそうです。認めた上での話でないと、客観性がないですよ。

内藤　広島のピースセンターも改めて行ってみると、ファサードのプロポーションとかピロティの柱の美しさは、やはりとてつもない才能を感じざるを得ない。

宮内　そりゃあそうですよ。世界水準ですごい。（オスカー・）ニーマイヤーなんか足元にも及ばないですよ。しかし、好き嫌いでいったら僕は広島は村野さんの「平和記念聖堂」[＊55]、あの素晴らしさの方に惹かれますね。

内藤　それは当然、そちらの方が好きだという人がいてもいいはずです。そういうふうにしていかないと、逆に正当な評価がされないんじゃないかと思います。

そして、「新建築問題」へ…。

内藤　「五期会」について伺いたいのですが、「五期会」は数年で解体するんですよね。

宮内　5年です。規約凍結というかたちで自ら解体したんです。だけど、あの運動は僕にとって大事な運動なんです。なぜかというと、建築家像をどう捉えるか、未来の建築家像をどうイメージするか、プロフェッションとしての建築家のあるべき姿は何か、というようなことを提起したのは、「五期会」が初めてなんです。そして“設計労働”という概念を出したのも「五期会」です。そこから僕は“五期会精神”と呼んで、僕自身も大事にしなくちゃと思って、以後、身を処してきたつもりです、僕は建築家ではないけど…。

内藤　「五期会」のことが、まだ自分の中の楔としてあるわけですね。

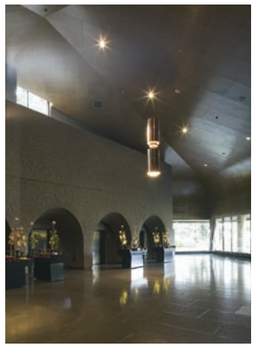
宮内　あるつもりです。外れているところもあるかもしれませんけど、気持としてはありますよ。これはジャーナリズム史にかかわることですから言わせていただくけど、特権を持たない建築家像を描くべきだ、というのが僕の主張だったわけです。

内藤　そもそも「NAU」から分かれて設立されるわけでしょう？メンバーがすごいですね。

宮内　まあね。丹下研では大谷幸夫から磯崎新まで、前川事務所は大高正人、河原一郎、鬼頭梓たち。池辺研のみねぎし・やすおや吉田秀雄。一匹狼では横山公男もいたし、歴史研究者の稲垣栄三、村松貞次郎、そしてジャーナリズムから平良敬一と僕。肝心なのは顔ぶれではなくて、その初心です。僕なりにいうと、まず“設計労働”という概念を引き出したこと。その創造的労働の組織のされ方こそ、要ではないか、としたこと。これは特権的建築家像の否定と克服への道を開くものでした。建築家の職能の問題の根本を「五期会」の初心は衝いたのです。それと関連するんですが、新建築社で首を切られた問題にもつながるんですよ。

内藤　そういうことなんですか？

西側の杉山から見る



弘前市斎場
設計：前川建築設計事務所、ミド同人 仲邑孔一
所在地：青森県弘前市常盤坂2-20-1
規模：地上2階
構造：RC造
竣工：1983年

左――炉前ホール
右――斎場の東側から岩木山を望む

[＊55] 世界平和記念聖堂（1953）村野藤吾
▸▸▸図版P.26

宮内　だって編集者の職能を認めない社長がいたわけですから。編集兼発行人である吉岡（保五郎）さんは、村野さんの「そごう」[＊56] の号 [＊57] を出した直後に編集部全員を呼び出して、「村野大先生の顔に泥を塗るような批評は許さん。おとなしく新築紹介に徹したまえ」とのたもうた。僕は我慢ならなくて…。

内藤　「木を見て森を見ず」と言っちゃった。

宮内　そう、その言葉を言っちゃったんです。

内藤　あの時に宮内さんはお幾つだったんですか。

宮内　31歳だと思います。若気の至りですよ。「“木を見て森を見ず”という言葉がありますが、批評するな、建物の紹介だけしろ…とおっしゃるのは、森は見るな、木だけを見ろというのと等しいじゃありませんか。そんなことでは編集の仕事はできません」と言っちゃった。その途端に「お前はクビだ」と…。新建築問題はそれが発端なんです。後で前川さんに叱られました。「君はひと言多いんだ」って。

内藤　僕のイメージでは、宮内さんは新建築問題のことがあるから、吉岡さんに対して非常に悪い感情を持っていただろうし、村野さんに対しても悪い感情を持っていたのかなと思いきや、実は後で村野さんには大変感銘を受けたような話をいろいろなところで書かれていますし、吉岡さんが亡くなった時も、感慨のある文章 [＊58] を書かれていますね。そういうことなんですね。

宮内　新建築問題は、やっぱり建築ジャーナリズム史の中で、何かが終わった、あるいは何かが始まった起点の事件なわけですよ。その中で僕は、吉岡さんについては、『新建築』を創刊された大変な先駆者だと思います。僕は首を切られたけど、人間としての吉岡さんに恨むところは何にもなし、で過ごしていました。同時に、村野藤吾のそごうも、批判はしましたけど、作品を批判したのであって村野さんの人柄について何か言ったわけじゃない。お目にかかったこともなかったですし。ところが、『建築年鑑』を創刊する時に関西の建築家たちに『年鑑』の趣旨を説明して協力をいただきたいと思いまして、大阪に行ったんです。村野さんの一番弟子である浦辺鎮太郎さんを始め、15、6人の関西建築界のそうそうたるメンバーが集まったわけですが、僕があいさつをした直後、浦辺さんが「村野先生について文句を言うような男が関西に来て何かをしようとしたって、そうはいかない」と言われて、会場は凍り付いたようになってしまったんです。これでは『年鑑』が成り立たなくなる、ピンチだと思いまして、僕はすぐに「お言葉を返すようですが、それは違います。人間としての村野さんに含むところは全くない」と。また、明日は、じきじきごあいさつにも伺うことを説明して了承していただいた。そして、翌日に村野さんにお目にかかりに行ったんです。僕はさすがに足が震える思いでしたが、村野さんは初めてにもかかわらず、非常にあつく接してくれたんです。以来、お手紙を頂いたり、東京では丹下さんが新館を設計した赤坂のホテルが定宿でしたから、そこへ来られると、よく電話を下さって、お目にかかりに行きました。

内藤　赤坂プリンスの旧館の方ですね、いつもお泊まりになったのは。

宮内　そうです。そこで『資本論』をボロボロになるまで読んだこととか、いろいろと伺いましてね、僕にとっては非常にありがたいお付き合いといったら失礼ですが、知遇を得たというのかな。ありがたかったですね。

東京海上ビルディング本館（1974）前川國男建築設計事務所

前川さんとのお付き合い

内藤　ところで、前川さんとのお付き合いのきっけはどうだったんですか？

宮内　これも新建築問題が契機ですよ。僕が前川さんと生身の触れ合いができたのは、実は新建築問題なんです。

内藤　そうですか？それ以前はそれほどではなかったんですか。

宮内　『国際建築』の編集者、『新建築』の編集者として座談会に陪席（ばいせき）したり、「建設ニュース」とか、取材でル・コルビュジエ展のことをじかに前川さんに伺いに行ったりする機会はありましたよ。だけど、前川國男と宮内某が、年が違うにもかかわらず、生身の触れ合いをしたことは全然なかった。

内藤　「五期会」の時は何かなかったんですか。

宮内　「五期会」の時は、“ワンマンコントロール批判”というようなことで、むしろ前川さんを批判的に見ていた立場なんですよ。お会いしても、公式の建築家像を巡って「そりゃあ君、違うよ。建築家協会 [＊59] はこうあるべき」というようなことをおっしゃっていた前川さんはいるけれども、僕と一対一のお付き合いはなかった。僕が新建築でひと言多い発言をしてクビになった時に、実は「前川さんの力を借りろ」と言われて、浜口さんに連れられて四谷の事務所に行ったんですよ。張本人の僕はサバサバしていたんですが、「君がそんなのんきな顔をしてたら困るじゃないか。君の発言で全員がクビになるというのに、ダメじゃないか」と浜口さんにしかられて…。

内藤　浜口さんに連れられて行ったんですか？

宮内　最初の時はね。それで、どういう経過でこうなったかという説明を僕はした。そしたら黙って聞いておられた前川さんが、「思想の相違によってクビっていうのは穏やかじゃないな」とおっしゃった。「吉岡君に僕からも聞いてみよう」と電話をかけて下さった。そこから始まったんです。

内藤　以前から、ある程度のお付き合いがあったのかと思っていました。

宮内　いや、それがきっかけです。だから僕にとっては新建築問題は非常にありがたかった。それから何日かたってから電話をじかにいただいて、今度は一人で事務所に行ったんです。「どうもお役に立てそうもない。解雇撤回は無理なようだ。だけど吉岡君も君のことはある程度、分かっているようだよ」と言って下さったんです。新建築問題当時は、既に、“川添（登）”[＊60] と、“平良・宮内”とは対立していたんです。川添が編集長で、平良がその後の編集長を継いで、そごうの号をやったんですよ。宮内も宮嶋（圏夫）も一緒に。だけど、川添は「五期会」の批判の文章 [＊61] を『新建築』で書いたりして、それに対して「五期会」の反批判を宮内某が書いている [＊62]。いわば公然の秘密だった、“川添”と“平良・宮内”が違うってことは。

内藤　別に仲が悪かったわけじゃない？

宮内　川添が僕のところに日参してきて新建築に引っ張り出したんですから、仲が悪いわけじゃない。ただ、ここでは言えませんけど、新建築問題は起こるべくして起こったんですよ。

内藤　それはあるでしょうね。首切りしたんですから、いろんなことがあったと思います。

「建築ジャーナリズム研究所」の設立と解体

内藤　今日の企画に結び付けて言いますと、「廃墟（はいきょ）から」というのはある種、戦後建築界に対する忸怩（じくじ）たる思いがその根底にあって、それが「宛名のない手紙」という特異な形のメディアとして出ていったと考えていいんでしょうか。

宮内　そうです。1970年9月、僕の中では自分一人で身を守るしかしょうがない。身を守るというか流れに抗しようと…。ここから先は、一歩、半歩たりとも後には引けない。ところが自分の中に杭がないと流されっ放しになっちゃう。一編集者として生きることを決意した時、何かをしたいと考えていた時に、前田俊彦さん [＊63] のつくった個人誌に巡り合って、大きな励ましになった。それから「宛名のない手紙」の発想を得たんです。「廃墟から」は、非常にわがままな身勝手なメディアにすぎないのですが、それを100人の方に勝手に送りつけた。迷惑な方もいっぱいいたはずだけど…。

内藤　先程、宮内さんの重要なポイントになるとおっしゃった「建築ジャーナリズム研究所」の解体はその辺りで起きた話ですか？

宮内　概略はそうです。“ジャー研”は、美術出版の大下さんを失って、『建築年鑑』も『国際建築』も事実上廃刊を言い渡された。ただ、『年鑑』は僕が提案して出したものですし、何よりも『年鑑』ですから5〜6年でやめることはできないと思いまして、美術出版から商標を買い取って自主刊行態勢を取ったんです。その刊行母体として会社組織にしたのがジャー研です。

内藤　卒業設計が確か「建築ジャーナリズム研究所」だったでしょう？

宮内　そうなんですよ。20年来の夢だったかもしれませんね。単に『年鑑』をつくるのではなく、この機会にある種の根拠地をつくり出したいという幻想があったのですが、現実には『年鑑』を2冊出して、2年で解体しました。

内藤　今から思えばちょっと不思議な感じというか、ニヤッとする感じもありますが、日雇い労働にいったりなさったでしょう。それも、その前後になりますか？

宮内　そうそう。あれは本当に恥ずかしい。

内藤　可愛い部分もありますよね（笑）。ただ、僕はそこに宮内さんの一番苦しい部分を見たような気がしました。僕はそれを象徴的な出来事だなと思ったんです。やや言いにくいところもありますが、やはり東大という場所は、社会的なエリートを育てることを目的にしているところがある。東京大学を出るということは、否応なく特権階級になるということですね。片一方で、一般大衆、いわゆる民草に身を寄せた時に、東大卒という自らの経歴が気にならないはずがない。そこの乖離というのは、宮内さんが苦しむところじゃなかったのかと。それが一番出たのが宮内さんの行動だったのかなという気がしているんですけど。

宮内　まあね。『無頼』にも“ニコヨン”の顛末を書きましたけど [＊64]、何ていうかな、僕の中ではやっぱり、さっき言ったように、流れに流されっ放しにならないでいたい、というのが基本にあるわけですよ。それで、編集事務所がもうダメになりそうだという状況の中で、道を歩いていると、年老いた労働者が現場をほうきで掃除していたんです。そういう姿を見ていたら、本質的には資本への奉仕に変わりなくても、あれなら魂を売らずに済むんじゃないか、自分にもできると思った。それだけの話なんですよ。で、もう一つ綺麗事でいえば、中国の文化大革命の過程での“下放”、肉体労働をする、労働者、農民の中に入る。これは素晴らしいじゃないかと思った自分がいたわけですよ。

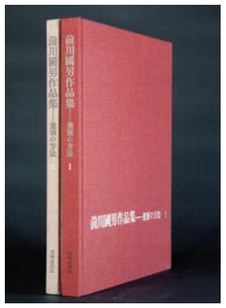
内藤　理屈としては分かるような気がします。

　僕は単行本になった方の『廃墟から』を改めて読みました。一気に読んだというよりも、最初は、宮内さんの思いが詰まりすぎていて、濃すぎるかなと思っていたんですが、読み始めたら非常に読みやすかった…。実はこれが書かれた時期、僕は学生だったので、追体験ができるんですね。それで一気に読ませていただきました。

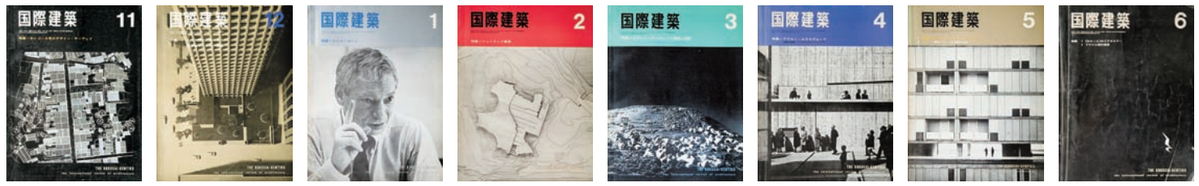
　ちなみに伺いますが、「宛名のない手紙」は当然、前川さんのところにも送っていたんですよね。前川

[＊56] 読売会館・そごう百貨店（東京）（1957）村野・森建築事務所ほか
[＊57] 『新建築』1957.8
[＊58] 宮内嘉久「吉岡保五郎氏の逝去に際して」「廃墟から」第19号,1972.11.30（後に『廃墟から―反建築論』p.207〜に所収）
[＊59] 日本建築家協会（JIA）
建築の設計監理を行う建築家の団体として、1987年に結成。1914年に設立された全国建築士会に始まり、何度かの改組・改名を経て、今日に至った日本で唯一の建築家の職能団体。1955年に国際建築家連合（UIA）に加盟し、その日本支部。建築士法に基づく“建築士”という資格の持つ不備に対し、設計監理業務に関する自主的立場を主張し、設計を専業とする国際基準に沿った建築家を自認する人々の会。入会には理事会の承認が必要（大川）

[＊60] 川添 登（1926〜）
（『INAX REPORT』No.171、p.23参照）
[＊61] 岩田知夫（川添登）「五期会批判」『新建築』1957.1
[＊62] 五期会委員会「批判にこたえ五期会の方向をあきらかにする」『新建築』1957.3
[＊63] 前田俊彦（1909〜93）
社会運動家・著述家／福岡生まれ。上京し共産党へ入党、治安維持法違反などで2度逮捕される。ベトナム反戦、三里塚闘争、どぶろく裁判などで権力と闘い続けた。また、“ヒューマニティ”をもじって「瓢鰻亭」を名乗り、ガリ版刷りの個人誌「瓢鰻亭通信」を1962年6月に創刊。後に、『瓢鰻亭通信』（土筆社　1969）、『続瓢鰻亭通信』（土筆社　1975）として単行本化
[＊64] 宮内嘉久「ある『下放』― 一つの報告」「廃墟から」第20号,1973.1.30（後に「廃墟から―反建築論」p.216〜、また『建築ジャーナリズム無頼』p.172〜に所収）



宮内氏がかかわった作品　左上から右に――『建築年鑑』、『前川國男作品集 建築の方法』（前川國男作品集刊行会実行委員会、美術出版社　1990）、『廃墟から』、『建築年鑑』のレイアウト2点、『国際建築』、『風声 京洛便り』、『燎 一つの栞』



さんは宮内さんが書かれたことに対して、どんな意見をお持ちでしたか？会う度に、「あれは違う」とか「そうだ」とか、そういう会話をされていたんですか。

宮内　そういう方じゃないんですよね。「ふ～ん」とか、「そうかい」とか、そういう感じでした（笑）。

内藤　かなり議論をされたのかと思ったんですが。

宮内　あの方は面白い人なんですが、僕が書いたものについて、事を分けて何かおっしゃるというタイプではないんですよ。ただ、そういう前川さんではあるけれども、「君、『大奥㊙物語』は見たかい？見てない？ダメだねぇ」というような、座談の名手でね。ユーモラスな方でもあったんですよ。ですから、ロングインタビューをまとめた『一建築家の信條』では極めて具体的にお話をされています。『信條』を見ていただけば、前川さんの全貌はほぼお分かりいただけると思います。

バック・トゥ・ザ・フューチャー

内藤　敗戦、全共闘問題に続く重要な出来事である“9.11”のことを、宮内さんの立場で、ご意見を聞かせて下さい。これは重すぎるかもしれませんけど、言ってみれば間接的ですよね。敗戦、焼け跡というのは、直接の体験の一部ですね。それから70年の学生運動と万博も直接的体験。ところが、9.11というのは、バーチャルですよね、我々にとっては。それはやはり、とても大きなことであるにもかかわらず、間接的な出来事です。種類は違うと思うんですが、それが建築に与える何かというのは、どうお考えになっているのか、その辺りのお話を伺いたいですね。

宮内　それは、先程、お渡しした「廃墟から」の再刊の第1号に詳しく書きました［＊65］。バーチャルとおっしゃるけど、現実にこれはあったわけでね。この「廃墟から」を再刊しようと思い立ったのは、実は9.11が一つのきっかけなんです。ここにありますので、最初の部分だけ読んでみますと、「昨2001年9月11日の出来事は、天啓のようにぼくの内側の風景をも一変させました。見えていなかった世界が一瞬に展け、見えていた世界はその光と影を微妙にもしくは激しく変えたのです」とそう書きました。「ぼくの中で風景が一変したと言いました。しかし変りようもないイメージが一つだけあります。それは廃墟です。具体的映像としてのそれは、ぼくのばあい、西空に近々と白い富士山を見はるかす、すべてが崩れ落ちた焦土の街・東京の姿です。（中略）「9・11」の衝撃は改めてぼくに教えてくれたのです」、「じつはそのイメージが、」その廃墟のイメージが「ぼくの世界像の出発点でもありかつ焦

［＊65］宮内嘉久「〈廃墟から〉再刊の辞」「廃墟から 続・宛名のない手紙（1）」再刊第1号，2002.3.10

点でもあるということを、「9・11」の衝撃は改めてぼくに教えてくれたのです」と書いています。

内藤　要するにフラッシュバックですね。

宮内　そういうことですね。と、同時にフラッシュバックよりは、僕の中では『賊軍の将』[＊66] で書きましたけど、前川國男がもし生きていて、あのバーチャルな映像を見たらどう思っただろう、ということを僕なりに思った。あそこに開けた虚空、崩れ落ちたWTCが崩壊して開けた虚空の先に、今とは全く別の新たな地平が開かれるのを前川國男は見たのではなかろうかと宮内は想像する、と結びました。それは本当に僕自身がそう思うんです。あの悲劇を生んだ、しかし、虚空の果てに、アラブ世界とヨーロッパ世界との対立と統一の果てに、本当に住むに値する街の姿が浮かぶ、望める地平が開かれるのではないかという期待、それだけです。更に言えば、そこに僕自身は新たなるロマネスク、かつてのとは違う新たなロマネスクが生まれるのではないかというイメージ。これは個人的なイメージですが…。

内藤　ロマネスクですか？

宮内　新たなるロマネスク。ローマの巨大列柱ではない、それとは全く違う低い佇まいのひっそりとした、それでいてプロポーションといい、テクスチャーといい、見事なコミューンを形づくる、しかし一つひとつ地中海沿岸の民家の街みたいな、そういうロマネスク的世界がイメージできるんではないかと僕は思うんです [＊67]。

内藤　宮内さんはオプティミストですね、やっぱり。

宮内　何年先か分からないですよ、それは。

内藤　ホロコーストをユダヤの人たちは、1000年忘れないと言ってるわけですからね（笑）。それも強烈な話ですよね。どういうふうにこれがいくのか。結論みたいなものはないかとは思いますけど。

宮内　1000年先ということと重ねていうと、やっぱりイメージも大事だけど、方法が大事だと思うんですよね。その方法っていうのは、僕はかつて堀田善衛さん [＊68] からね。「あっ」というような教えを受けたんですよね。それは“バック・トゥ・ザ・フューチャー（Back to the Future）”なんです。この言葉と概念を僕は知らなかったんです。

内藤　新聞のコラムで書かれていましたね。読みました。

宮内　なぜはたと自分の膝を打ったかというと、なんだ、自分が今までやってきた方法というのは、バック・トゥ・ザ・フューチャーじゃないかと。後ろを見ながら前へ進むっていうことでしょ。

内藤　ギリシャ人が要するに、後ろ向きに未来に入っていく。そういうことですよね。

宮内　そうそう。何となく未来を目指し、明日に向かって進んでいくと思っているけど、古代ギリシャ人の世界像はそうではない。未来なんてものは見えないんだと。見えているのは現在と過去だけだと。過去と現在を見ながら背中から未来に入っていく視点こそが、ギリシャ人の世界像の基本だと教えられた。

内藤　堀田さんのああいう斬り方というのはすごいですね。

宮内　すごいと思いますよ。翻って、僕の仕事を見るとバック・トゥ・ザ・フューチャーなんですよ。『建築年鑑』がまさにそう。『年鑑』をつくろうと思った発想の元にあったのは、言ってみれば、バック・トゥ・ザ・フューチャーなんですよ。ジャーナリズムというのは前へ前へ追っ掛けて進むわけでしょ。やれ新築の良い建物だ、やれ未来の建物だって。僕はその当時から、『国際建築』や『新建築』で編集の仕事をやりながらも、こんなに前ばっかり見ていていいのか、立ち止まって後ろを振り返るのが大事なんじゃないかと思っていました。マルクスの言い分ではないけど、“すべては歴史的に見られなければならない”というのが、ジャーナリズムの基本じゃないかと思いました。

　『国際建築』を失って、何をよりどころにするかを考えた時に『年鑑』をつくろう、これを編集事務所の柱にしようと思いました。『風声（ふうせい）』[＊69]、『燎（かがりび）』[＊70] もバック・トゥ・ザ・フューチャーでしょう。僕は無意識のうちにやっていたんだと思います。僕の方法論として。

内藤　ジャーナリズムや編集という行為そのものが、そういう性質を帯びているとも言えますね。

宮内　うーん、果たしてそうなのかどうか。記録に残すという意味でですか？

内藤　そうです。その行為自体が背中から後ろ向きに未来に入っていく宿命を負っているんじゃないでしょうか。背中から未来へ入りつつ宮内さんの活動は続きますが、75年から始まった『風声』、『燎』の企画はすごいメンバーの方が揃っていますね。

宮内　そうなんです。風声同人は最初は7名。前川國男、白井晟一、大江宏、岩本博行、武者英二に神代雄一郎と僕。1986年10月から大谷幸夫、永田祐三が加わったんです [＊71]。

内藤　その経緯も『無頼』に書かれていますが、宮内さんを支えようという人の輪が地下茎のように広がっていったのではないかと思います。

若者よ、自立せよ

内藤　この本は『建築ジャーナリズム無頼』というタイトルでしょ。“ジャーナリスト”とはどうしてしなかったのかなと思いました。

宮内　それは、ジャーナリストという言葉には抵抗感があるからだし、僕は“ジャーナリズム”を確立しようと頑張ってきたんだから…。ジャーナリストなんて考えたことない。それはもう初めからそうですよ。この本は、最初は『物語・戦後建築ジャーナリズム』としたんですよ。あとがきには書きましたけど、晶文社の方から「もうちょっと勢いのあるタイトルがほしい」と言われたんです。どうしようかなと思っていた時に、ありていに言うと、“わがテキ”[＊72] にちょっと話をしたら、「“無頼”はどう？」と言われて、「あ、それは良い！」と…。それで『建築ジャーナリズム無頼』になったんです。英語で無頼というのは“villain”とかいうんですよね。発音も似ているんですよね。

内藤　あとがきにそんなこと書いてありました？

宮内　villainであり、同時に頼るところなし。“独立”なんですよ、無頼って。“independent”なんですよ。だから“建築ジャーナリズム・インディペンデント”。同時に、“無頼にぶざまに生きてきた男の物語”というので、『建築ジャーナリズム無頼』にしたんです。

内藤　無頼に不器用に生きてきたってことですね。

宮内　そうそう、不器用に生きてきたんですよ。

内藤　それに比して建築家はなかなかそうはいかない。建築家は世の中にまみれるところは同じかもしれないけど、建築そのものが世の中に存在し続けるわけですから、なかなかつらいものがあります。無頼に徹したら仕事がこない。社会の中で建物を設計せざるを得ない建築家という職能の自己矛盾です。どの仕事も実はそうなんだけど、建築家という立ち位置はその度合いが激しい。前川さんが東京海上の時にもらした感想のミニチュア版みたいなものはいくらでもあるはずです。

宮内　「大きなものは胸につかえる」とか。

内藤　「僕はそんなに偉くないよ」とか、それはいろいろありますね。

　最後に、今の若い世代、学生から駆け出し、30代くらいの設計者に言いたいことってありますか？メッセージです。

宮内　これだけは絶対、口にしてはいけないと肝に銘じ続けているのは、近頃の若い者はダメだというセリフ。どんなにそう思う時があっても、一般化してはいけないと思っているんですよ。事実、それは地震の後のボランティア活動とかを見たって非常に素晴らしい若者がいることは確かですよね。比率からいったら1,000人に1人とか、1万人に1人なのかもしれないけど、でもやっぱりそういう素晴らしい若者に未来を賭ける以外ないじゃないですか。そういう素晴らしい若者には何も言うことはない。ただ一つだけ、日本の若者にはやっぱり自立してくれと。それだけだね。自ら立ってくれ、自らを律して自由であってほしい、それだけ。それが基本ですよ。

内藤　自立というのは、要するに自分の頭で考えて、自ら律し、行動するということですね。

宮内　自己を律する。自らの足で立つ。それで自由である、自主的である。自立、自律、自主、自由。これを確立してくれと、それだけ言いたいですね。それ以外は何もいらないと思います。

内藤　宮内さんの半生を語っていただいたような気がします。幾つもの重要な事柄が絡み合って、複雑な経緯を辿って来たようにも見えますが、それらを貫く宮内さんの思考は、いささかもブレがないことを感じました。本日は、ありがとうございました。また貴重な証言が増えました。✽

（2007.7.27収録）

宮内氏が描くロマネスク建築のイメージ（スペインにあるシトー会の『ポブレー修道院』）（出典：『L'ART CISTERCIEN』Zodiaque）

風声同人会（1978年4月、京都山科で同人作品を見学）（写真：田口寛二）

『前川國男 賊軍の将』

［＊66］『前川國男 賊軍の将』宮内嘉久著（晶文社　2005）▶▶▶図版下
［＊67］ロマネスク建築のイメージ　▶▶▶図版上
［＊68］堀田善衛（1918〜98）
作家／富山生まれ。『広場の孤独』（中央公論社1951）で芥川賞受賞。その他の著書に『方丈記私記』（筑摩書房　1971）、『ミシェル城館の人（全3巻）』（1991〜94）など
［＊69］『風声　京洛便り』（岡澤　第0号，1976.10.8〜第20号,1986.3.31）▶▶▶図版p.34
建築の問題を風通しの良い場に持ち出すこと、人を大事にすること、常に歴史を振り返ることを趣旨とした同人誌（宮内）
［＊70］『燎　一つの栞』（INAX　第1号,1987.6.20〜第26号,1995.10.20）▶▶▶図版p.35
変えたのは誌名だけで、内容・形式とも『風声』を継承した（宮内）
［＊71］風声同人会は、1975年4月に7名で発足。その後、燎同人会と名称を変更し活動した。1995年11月に解散　▶▶▶図版中

［＊72］宮内嘉久の妻、宮内貴美子

みやうち・よしひさ――編集者／1926年生まれ。1949年、東京大学第二工学部建築学科卒業。『生活と住居』、『国際建築』、『新建築』『建築年鑑』の編集に携わる。1958年、宮内嘉久編集事務所設立、現在に至る。
主な著書：『少数派建築論』（井上書院　1974）、『廃墟から―反建築論』（晶文社　1976）、『一建築家の信條』（共編著、晶文社　1981）『建築・都市論異見』（田畑書店　1984）、『前川國男作品集 建築の方法』（共編著、美術出版社1990）、『前川國男 賊軍の将』（晶文社　2005）など。

ないとう・ひろし――東京大学大学院社会基盤学 教授・建築家／1950年生まれ。1974年、早稲田大学理工学部建築学科卒業。1976年、同大学大学院修了。1976〜78年、フェルナンド・イグーラス建築設計事務所。1979〜81年、菊竹清訓建築設計事務所。1981年、内藤廣建築設計事務所設立。
主な作品：海の博物館（1992）、安曇野ちひろ美術館（1997）、茨城県天心記念五浦美術館（1997）、牧野富太郎記念館（1999）、十日町情報館（1999）、倫理研究所 富士高原研修所（2001）、ちひろ美術館・東京（2002）、島根県芸術文化センター（2005）など。

取材協力・資料・写真提供
大川三雄（日本大学理工学部 准教授）
カトリック幾町教会
埼玉県立歴史と民俗の博物館
新建築社
弘前市斎場
前川建築設計事務所
MURANO design
（50音順）

＊特に明記のない写真は、2007年9月に新規撮影したものです。

［次号予告］
次号の「著書の解題」は
林昌二の『建築家 林昌二 毒本』。
2008年1月20日発行です。

宮内氏（左）と内藤氏

［対談後記］　内藤 廣
「無頼の由来」

　目を庇うために掛けられている薄い色眼鏡、その奥に秘めた鋭い眼光は見えない。優しく丁寧な口調から発せられる言葉は鋭角的で隙がない。宮内さんの言葉の特徴は、論理的でありながら、その後ろに尽きせぬ心情が見え隠れすることだ。強さや弱さ、固さや柔らかさ、そうした言葉の質感は、この心情によって支えられているに違いない。だから発せられる言葉を信じることができる。

　宮内さんは、建築メディアの中では一貫して異端児であり、何故か怖がられてきた。言いたいこと、信じていることは、相手が誰であろうと、時代がどうであろうと歯に衣着せずハッキリと言う。その態度は“無頼”、自ら本の題にも加えている。

　しかし、よく考えてみると、宮内嘉久という傑出した言論人を無頼へと追いやったのは誰だったか。それは宮内さんが鋭く批判しつつも愛し続けた建築界に他ならない。建築界は遂にその視線を内側に抱えることができなかった。前川國男や村野藤吾が宮内さんに対したような懐の深さがなかった。戦後建築ジャーナリズム史というものが将来書かれるとしたら、このことは抜けない棘となって存在し続けるに違いない。✽

[特集2]コラム

建築ジャーナリズムが「顔」をもっていた時

八束はじめ
HAJIME YATSUKA

この特集では、序論は著者に近しい評者が書き、コラムの方は部外者というか、著者にはあまり縁のない評者が書くという分担になっているらしい。その意味では私はうってつけのコラム担当者なのかもしれない。そこそこ長い建築ジャーナリズムとの付き合いだが、宮内さんにはたった一度しかお目にかかったことがない(ご本人は忘れておられるかもしれない)。世代の違いといえばそうだが、殆ど同年輩の布野修司氏は、宮内さんといえば引き合いに出ないことはない前川國男さん(と書いたらいいのか、先生と書くべきなのか?)を通して宮内さんとは近いはずだし、序論担当の松隈さんに至っては私よりかなりお若いはずだ。正直にいえば、この「圏域」と私には少々距離がある。前川さん(にさせて頂く)には生前お目にかかる機会がなかった。前述の距離はそのせいというわけでもないだろうが、これも正直いえば、惜しいことをしたという気持ちはあまりない。建築家前川國男を軽んじているわけではない。しかし直接接することで何かを確かめておきたかったという事柄はあまりないのだ。

宮内さんは読んでおられないと思うが、2、3年前に書いた本[*]で前川さんのことを、読みようによってはファシスト呼ばわりしたともとられかねないテクストを書いた(ある歴史家がそれで楽になったといったとかいわないとか)。ここでの主役は前川さんではないから、それについての「弁明」を殊更するつもりはないが、批判でも、ましてや非難でもなかったとはいっておきたい。むしろ人間前川の誠実さをこそ、それを書くときの私は感じていた。だけれども、この思いを宮内さんのみならず前川周辺の人々にはなかなか分かってはもらえないだろうとも感じていた。それがこの「距離」感である。

だからこのコラム執筆に気は進まなかった。大体それもあって、私はライター宮内嘉久の良い読者ではなかった。『少数派建築論』は本棚にあるが、それだけで、『建築ジャーナリズム無頼』は読んだことがなかった。「無頼」とかいわれたって、という気もしないではない(失礼)。でもこのコラムは既に一度逃げているので…ということで引き受けたわけだが、読んでみてこれが結構ハマった。確かに戦後の「建築ジャーナリズム」の鼓動が聞こえてくるのだ。それは、「戦後」ということばがそれなりのニュアンスをもって感じられる者たちだけに聞こえてくるものかもしれない。だからもっと若い世代からは、そんなモンは聞こえないし、それこそアンタ達との「距離」だね、とかいわれるのかもしれない。ノスタルジーというやつだ。でも懐古趣味(という誹りは——宮内さんにはご迷惑なことだろうが——受けておくことにして)にせよ、ノスタルジーもそれなりだよ。後ろ向きでも、力がなかったら引きつけるものもないわけだから。この点で宮内さんのライターとしての力量は端倪すべからざるものがある。もちろん、それは編集者宮内嘉久の土性骨の座りようでもあるわけだが。「無頼」とかいわれたって、とかいいながら、早速巻き込まれているには違いないが、何故か悪い気はしない。

そう、これは「建築ジャーナリズム」というものが「顔」をもっていた頃の鼓動なのだ(今は顔どころか雑誌そのものがあらかたなくなってしまった)。その音は私も確かに知っている(世代的には宮内さんではなく、次の植田実さんとかの頃ということになるが)。あまり他人の悪口を書くものではないが、最近の「建築ジャーナリズム」からは、とんとその臭いがしない。コンビニみたいに(つまり今の建築みたいに?)無味無臭だ。夜を徹して酒を飲みながらという習慣がない下戸の(おまけに煙草もすわない)私には、そういう「汗」と「唾」と「煙」と(下手したら罵声)がしみついた臭いは、さほど縁がなかった世界ではあるけれど、確かに覚えはあるのだ。引替え今のジャーナリズムは、と毒づくのは年寄りじみるのでやめておくが、かつてあったものは確かに悪くなかった、と感じさせるものがこの本にはある。それを思想の力だ、とか、まして(編集者の)良心の高さだとかお調子はいうまい。私には思想的共感はさほどないし、良心の方にはそもそも関心がない。しかし、それは結局の所(大先輩に生意気ないい方だが)宮内さんが建築をお好きであるということから来ているらしい。何てことだ。ということは自分だってそうだ、ということではないか?これには我ながら少々狼狽した。今さら惚れた腫れたで建築のことを考えようなどとは露ほども思っていなかったからだ。でも、こういう狼狽も不愉快ではない、と考えるのはこちらも歳ということなのかしらん?✽

[*]『思想としての日本近代建築』八束はじめ著(岩波書店 2005)

やつか・はじめ——建築家・批評家・芝浦工業大学 教授/1948年生まれ。1977年、東京大学都市工学科博士課程中退。磯崎アトリエを経て、UPMを主宰。2002年から現職。
主な作品:そごう WING 苦楽園(1991)、東京芸夢本社ビル(1994)、白石市情報センター(1997)、美里町文化交流センター(2002)など。
主な著書:『批評としての建築』(彰国社 1985)、『近代建築のアポリア』(PARCO出版局 1986)、『ロシア・アヴァンギャルド建築』(INAX 1993)、『ミースという神話:ユニヴァーサル・スペースの起源』(彰国社 2001)など。

[特集2]コラム

時代を超えた建築

五十嵐敬喜
TAKAYOSHI IGARASHI

建築は言うまでもなく都市の重要な構成物として社会のありよう全体と関係し、そのつくり手もまた同じように社会の中で、その影響を受けながら社会に発信する。宮内さんは、戦後、途中メシが食えない、『新建築』編集過程での馘首、編集事務所の破産、全共闘運動への共感と警視庁との交渉、日雇い労働などの労苦を経て、戦後“建築評論”という新しい分野を切り開き確立した。それだけでなく、あまたの評論家という評論家が時代に合わせてその言説をころころ変化させてきているのに対し、首尾一貫、人間的な近代建築の主張を継続してきた人として知られている。その真骨頂は「前川國男」という偉大な建築家を媒介にして、この建築家と社会の関係を解読した2冊の著書、『建築ジャーナリズム無頼』と『前川國男 賊軍の将』に見られる。以下、私なりに宮内さんのモチーフを整理してみたい。

1. 宮内さんは特別、前川が好きである。どこが好きかというと、“時流にも、営利にも、権力にも歪められない精神の自由”という人格が第一であり、その発露として大学卒業後のパリのル・コルビュジエの事務所への留学、「東京帝室博物館」への負けを覚悟の応募(「負ければ賊軍」の呼び掛け)、戦後「プレモス」の開発、プロフェッサー・アーキテクトやゼネコン批判、建築家協会や「入札をしない建築家の会」への参加とリーダーシップ、そして東京海上ビルの「美観論争」、更には大学全共闘運動への共感、生前の叙勲の辞退などがあり、ここには戦後のいわば反体制を貫きながら生きた人(負けた人)のドラマがあった。宮内さんは何よりもこの前川の姿勢に惚れた。勝者として“神殿”に居座った丹下健三に対して批判的なのは当然であろう。

2. 前川はル・コルビュジエの門下生であり近代建築の優等生である。建物の内と外をつなぐ柔らかな動線、建物と公園など外部空間との一体性、軒の出の深い屋根、ホールと吹抜けなどなど、“近代”のデザインは“神殿”を撃ち、人民に新しい夜明けの到来を告げた。特に政府・資本の抵抗にあって受難の末建てられた東京海上ビルは周りに広大な空地を持ち、レンガ色の肌は東京駅やお濠と調和しているという。

3. 建築は当該個人の作品であることはもちろんだが、作品も、良い環境に恵まれてこそである。前川を媒介にして本格的な建築ジャーナリズムの構築を目指した宮内さんは、もちろん、この建築を取り巻く環境についても無縁ではあり得なかった。

そして率直に日本の建築環境を見ると、いかにもそれは歪んでいる。基本設計と実施設計の分離、つまり建築家は基本設計をするだけで実施設計や工事管理には携わらない、構造と計画に偏り、そもそも建築家とは何をする人なのかを問おうとしない建築教育、メタボリズムグループに見られるような時代におもねる建築家、ゼネコンとサラリーマン・アーキテクト、“権力”と戦わない建築ジャーナリズム、“工業化イデオロギー”への従属、ダンピング競争に明け暮れる設計入札などなど。これらは、いずれも現代に通じる特殊日本の奇形的な状況であり、その究極にあったのが一昨年に明らかになった姉歯耐震偽装事件とそれに対する建築界全体の“無力ぶり”であろう。宮内さんはもちろんこれを外在的に批判するだけでなく、これらの傾向に抗すべく「五期会」の立ち上げ、日本の大工や棟梁の見直し、“職能の確立”を掲げた建築家協会の設立などを紹介し、具体的なサポートを行った。宮内さんはジャーナリストであったが、しかし観察者ではなく、行動の人でもあったのである。

しかし、宮内さんの本格的な評論は前川の死去した1980年代で終わる。その後、例の姉歯事件を見て、どこかから、「前川さんがいたらどう動いただろうか」というようなことを言っているという話は聞こえてきたが、必ずしも前面に立って動くというようなことはなかった。そして社会は姉歯事件を社会の重大問題として、また建築界の一大スキャンダルとして受け止めたが、肝心の建築界は右往左往するだけで国土交通省に操られ、真の建築ジャーナリズムもそれに合わせて消滅したように見えるのである。

私から2つ、宮内さんに聞いてみたいことがある。

宮内さんはもはや建築家に期待していない。絶望の後に辿り着いたのはやはり戦後出発の起点となった“廃墟”であった。しかしそれにもかかわらず、というより、だからこそ“夢”を見る。「『建築家の手にかからない建築』の、部厚い肥沃な大地」[*]から「明日の——いまとはまったく別の——偉大な建築」[*]が出現するかもしれない、サーリネンのあの夢である。そして一般論でいえば、その夢を実現する土壌をつくるのは建築家以前の市民という存在である。注意しなければいけないのは、かつて建築の「部厚い肥沃な大地」を形成していた市民も、いつしか“建築の生産者”から“建築商品の購入者”に転換されてしまったという事実である。消費者を再び生産者に変えなければ「別の偉大な建築」は生まれようもない。ヨーロッパなどと異なって、市民がいかにも無造作に操作されてしまったのは、日本政府が極度に都市・建築を商品化したこと、どんな変な建物であっても法に適合していれば確認が下りるという建築確認制度、あるいはまるで自動車免許証のように技術さえあれば誰でも建築士になれる建築士法というようなシステムがある。建築家の人格や手腕に頼った“近代”と異なって、“現代”はこの市場化とシステムを相手にしなければならない。だが、“建築ジャーナリズム”は“建築家”(のあれこれ)にどっぷり浸かったまま、ほとんどこの論点を追求していない。

もう一つ、将来、近代を超えた偉大な建築を出現させるには近代の悪を決定的に摘出しなければいけない。その象徴的な存在が“超高層ビル”である。しかし、かの「巨大建築論争」に見られるように、神代雄一郎の「巨大建築に抗議する」に対する宮内さんの回答は、前川の援護もあってか超高層それ自体が悪というわけではなく、“われわれに好ましい建物とはどのようなものなのか”を考えるべきだという地点にとどまっていた。でも東京海上ビルが、周囲にいくら空地を取り市民に公開したといっても、それはやはり市民の連帯に基づく美しいものとは無縁であろう。超高層ビルの乱立に対する視座をどう構築するかは焦眉の課題なのであり、宮内さんにはまだ大きな仕事が残っているのではないか。✽

[*]『建築ジャーナリズム無頼』

いがらし・たかよし——法政大学法学部 教授・弁護士/1944年生まれ。1968年から弁護士として不当な都市計画、建築被害の弁護や市民活動に数多く携わる。神奈川県真鶴町の「美の条例」制定にも尽力。1995年から現職。専攻は都市政策、立法学、公共事業論。
主な著書:『都市法(現代行政法学全集16)』(ぎょうせい 1987)、『美の条例』(共著、学芸出版社 1996)、『美しい都市と祈り』(学芸出版社 2006)、『建築紛争』(共著、岩波新書 2006)など。